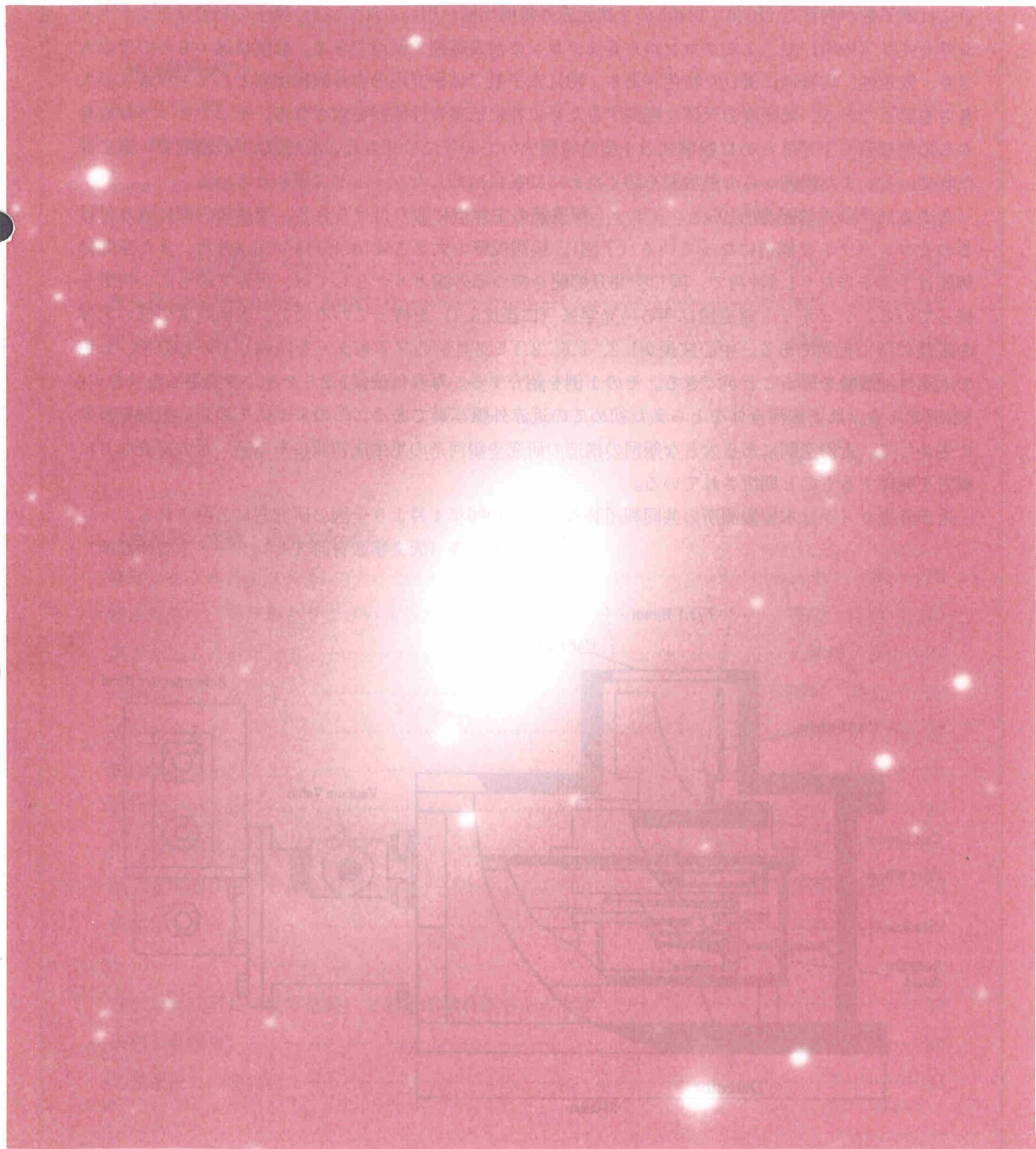


# 東京大学

大学院理学系研究科・理学部

# 廣報



## 表紙の説明

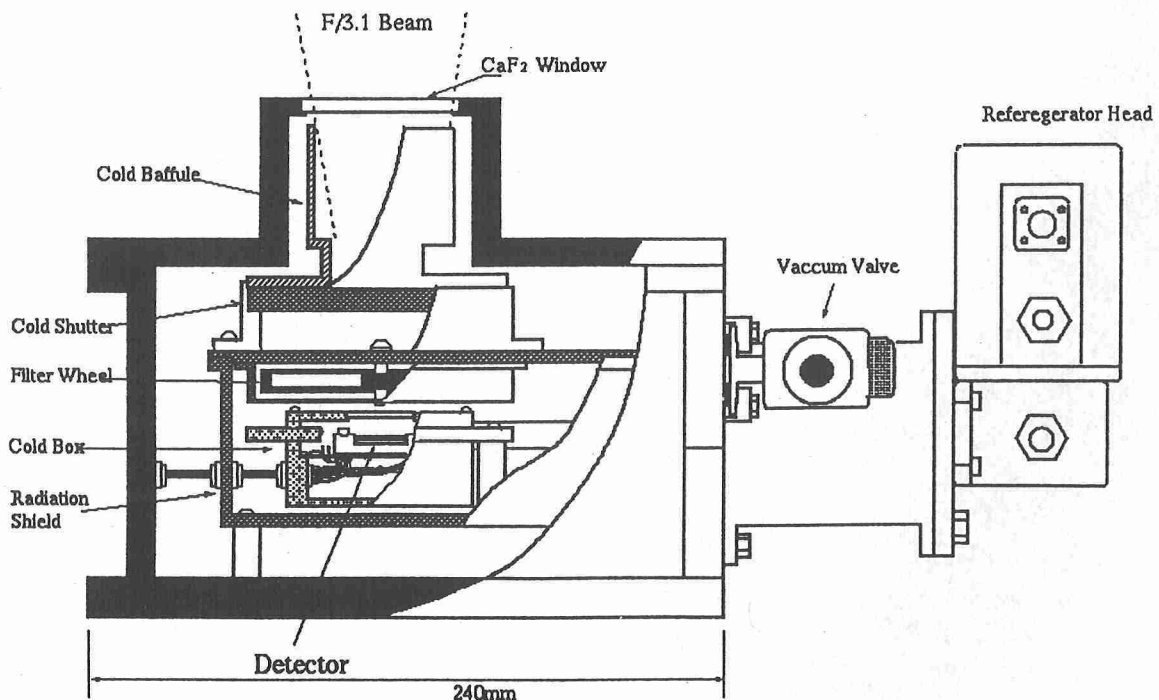
### メシア81銀河の近赤外線画像

天文学教育研究センター木曾観測所では天体観測用の大型近赤外線カメラを開発してきた。このカメラには素子数が約百万 ( $1040 \times 1040$ ) の2次元赤外線検出器が用いられている。素子の材質はプラチナ・シリサイド (PtSi) で、1ミクロンから5ミクロンの波長範囲で使用できる。感度は低いもののその大きさ、安定性、均質性に優れた特色があり、特に素子数では研究用の赤外線検出器として世界最大の大きさを誇っている。低照度の天体を観測するために特に低雑音性能が要求される。そこでチップは自身からの熱雑音を下げるために機械式の小型冷凍機でいて60Kに冷却され、0.1K以下の精度で一定に保たれている。また周囲からの熱放射を防ぐために70Kに冷却したシールドで覆われている。

このカメラは木曾観測所105cmシュミット望遠鏡の主焦点に取り付けられる。望遠鏡内部に取り付けるのでコンパクトな構造になっている (下図)。観測視野の大きさは18.4分角 $\times$ 18.4分角、また空間分解能は1素子当たり1.1秒角で、同じ空間分解能を持つ赤外線カメラとしては、世界で最も広い視野を持っている。シュミット望遠鏡は明るい光学系 (口径比3.1) を持っているので、表面輝度の低い天体の観測に特に有効である。中心波長が1.2、1.6、2.1ミクロンのフィルターを内蔵しているので、3色の近赤外線画像を得ることができる。その1例を紹介する。写真は波長1.2ミクロンで撮影したメシア81銀河である。ほぼ銀河全体をとらえた初めての近赤外線写真である。このようにその広い視野を有効に生かして、近傍空間にある大きな銀河の構造の研究や銀河系の星生成領域にある若い星の探査などに威力を発揮するものと期待されている。

近赤外線カメラは木曾観測所の共同利用装置として1996年4月より全国の研究者に公開される。

市川 隆 (天文学教育研究センター・木曾観測所)



## 目 次

表紙（メシア 81 銀河の近赤外線画像）

表紙の説明	2
COEプログラム「初期宇宙の探究」と初期宇宙研究センター	佐藤 勝彦…… 4
野本憲一教授の学士院賞受賞によせて	尾崎 洋二…… 6

### 《新任教官紹介》

私の専門分野	新井 良一…… 7
分子集団遺伝学と分子進化学	田嶋 文生…… 8
Face-to-Face	栗田 敬…… 9
自己紹介	野崎 久義……10
大学と国立研究所	茅根 創……11
霊長類移動運動の発達と制御	木村 賛……13
東京大学に着任して	相原 博昭……14
着任のご挨拶に代えて	西田 生郎……15
植物園雑感	福田 裕穂……16
新しい言葉	深田 吉孝……17

### 《退官者の挨拶・退官者を送る》

本郷1956-1996	富永 健……18
富永健先生、ありがとうございました	葉袋 佳孝……20
東大を去るにあたって	三津橋 務……21
三津橋務先生を送る	岡崎 廉治……22
思い出すこと	鵜澤 淑子……23
鵜澤淑子さんのこと	浜野 洋三……24
植物園での3年	矢内 敏明……25
矢内敏明事務主任を送るにあたって	村上 哲明 平原 茂子……25
私と植物園-思いでふたつ	伊藤 義治……26
伊藤さんを送る	下園 文雄……27
理学系研究科長（理学部長）と理学部職員組合との交渉	28
人事異動報告	30
名誉教授との懇談会	34

# COEプログラム「初期宇宙の探求」と初期宇宙研究センター

佐藤勝彦 (物理学専攻)

昨年7月、我々のグループの申請した「初期宇宙の探求」が、平成7年度より文部省が新たに始めた中核的研究拠点プログラムの一つとして選定されました(メンバーは物理学教室(佐藤勝彦、釜江常好、折戸周二、牧島一夫、須藤靖、蓑輪真、山本智)、天文学教室(野本憲一)、天文学教育研究センター(吉井讓)の9名)。これは理学系研究科、東京大学の強い支援のたまものと感謝しております。東京大学総長名で文部省に提出していた拠点形成支援計画書に基づき、理学系研究科内に「初期宇宙研究センター」の設置を7月の研究科教授会において決定していただきました。すでに理学部4号館1階のピロティ部分に100平米たらずの計算機室、研究員室、センター長室などの部屋を整備していただき、また4号館内にX線実験室としてクリーン・ブースを作っていただきました。平成8年3月末には富士通ベクトルプロセッサ、VXを主体とした天体画像処理システムが設置されるようしております。人的にもCOE研究員として日本学術振興会の特別研究員2名、及び外国人研究員2名の枠を与えられております。ここではこの拠点形成プログラムによって、私たちが5年間のこのプログラム期間内にどのような研究を進めようとしているのか簡単にご紹介いたします。

「我々の住むこの世界はどのように始まったのだろうか?この疑問は、人類がその歴史の始まったところから問い続けてきた疑問です。一般相対論の枠組みの上に構築された現代の標準理論、ビッグバン宇宙論や、この十余年、爆発的に進歩した素粒子論的宇宙論は宇宙の創生のみならず、初期宇宙において宇宙構造を形成する種がいかにかに仕込まれ、それがいかに進化して今日の豊かな構造を持った宇宙が形成されたかを予言しています。「量子重力的効果によって生まれた宇宙はインフレーションと呼ばれる加速度的急激な膨張を始め、マクロな宇宙になった。インフレーションの終わるとき解放される潜熱によって宇宙はあつい火の玉となった。そしてインフレーション中に仕込まれた密度の揺らぎは火の玉の膨張・冷却とともにしだいに成長し宇宙の構造がしだいに形成された(図1)。」これは現在標準となっている宇宙構造の起源に関するパラダイムです。2年前米国の打ち上げた宇宙背景放射観測衛星COBEは宇宙開闢から30万年頃の宇宙の地図を描き出しました。そこに観測された密度揺らぎはインフレーション理論の予言するものときわめて良い一致を示しました。これにより、この標準パラダイムは大きな指示を受けることとなったといえるでしょう。しかし、この素粒子論的モデルをも含む広い意味でのビッグバン宇宙論の描像に、より具体的な肉づけを与え、そこに内包される基本的パラメータ(宇宙の曲率など)を

決定し、暗黒物質など隠れた存在の正体を解明し、ひいてはこうした宇宙観そのものの当否を確かめる作業は、ようやく発展途上といえるレベルに到達したところといえるでしょう。人類の認識の根幹に関わるこの重要課題に取り組み、宇宙の創生から宇宙構造の力学的進化・化学進化を経て現在の宇宙へ至る統一的な宇宙像の構築を完成させるためには、必然的に現在よりはるか昔の宇宙、したがって極めて遠方の宇宙—初期宇宙—をさぐる必要があります。

宇宙では遠方を観測することは過去を観測することです(図2)。1億光年先の宇宙を観測することは1億年前の宇宙を観測することです。時間を遡った過去の姿が直接観測できるということは、科学の世界では極めて特異なことであり、宇宙の研究に与えられた大きなメリットといえることができます。

初期宇宙の研究はハイテクノロジーを用いた観測手段の急激な進歩により、宇宙物理学の最先端の課題として今世界的に強力に推進されています。初期宇宙研究の推進において最も本質的な要素は電磁波のあらゆる波長による観測、高エネルギー素粒子観測などを総合的有機的に進めなければならないことでしょう。幸い、東京大学大学院理学系研究科には電波からガンマ線にいたる観測で、又素粒子観測で実績のある研究者が集まっています。また理論的研究においても世界に先駆けた研究を進め、多くの業績があるといえましょう。

図3に宇宙の誕生から大構造形成に到る初期宇宙の進化と基本的課題を左側に、これらに対して我々がどのようにアプローチするかの概略を右側に示されています。5年間の研究期間中におよそ15億円の科学研究費が交付されると期待していますが、これらの研究費によって、研究の推進と拠点形成を進めようとしています。おもなプロジェクトとしては、1. X線天文衛星搭載用硬X線検出器の開発、2. 2m専用望遠鏡の設置とそれによるクエーサの連続観測、3. サブミリ波電波望遠鏡の設置と中性炭素線による分子雲観測、4. 気球観測による反物質探査、5. 広域銀河3次元分布観測と解析による大構造解析、6. 低温検出器による暗黒物質の直接検出などがあげられます。2.については現在ハワイ、ハレヤカワ山頂を最適地として、設置場所を調査中で、また3.については富士山山頂に設置すべく調査中です。理論的研究にはこれらのプロジェクトに比べると大きな研究費は必要ではありませんが、宇宙の創生から、構造形成、銀河形成、銀河の化学進化、元素合成、超新星爆発にいたる宇宙進化のシナリオを作り上げるために、シミュレーションの研究を重視しながら進めようとしています。

わが国における宇宙の研究は、宇宙科学研究所および国立天文台という2つの国立共同利用研究機関により強



方に推進されています。また素粒子的宇宙物理学、宇宙線の研究分野では高エネルギー研究所や東大宇宙線研究所がその共同利用研としての役割を担っています。実際、図3に示した研究の多くはこれらの共同利用研との共同研究ですが、言うまでもなく、我々のメンバーが中心になって推進しようとしているもので、ある意味では共同利用研と大学間の相補的關係として理想的な関係ではないかと考えられます。また2.や4.、5.のプロジェクトのように、国際的協力は研究を推進する不可欠の条件といえるでしょう。しかし、海外への装置の持ち出し、海外での観測遂行には今持って多くの困難が残されています。これらを解決しながら研究を進めるためには、理学部事務や本部事務局の協力なしには不可能と言えるでしょう。幸い事務担当者の献身的努力により、幾多の困難も解決に向かっていていると考えられます。

このCOE形成プログラムは平成9年度までの5年間ですが、この期間に計画中の研究が終了することは、あり得ないと言えましょう。新たにこの形成プログラムによって作成した観測装置はこの期間中に稼働を始め、興味深い新たなデータが出始めることは間違いないでしょうが、豊富にデータを出すことができるのはむしろプログラム終了後の数年というべきでしょう。我々は5年の期間終了後も何らかの形で初期宇宙研究センターを数年以上の長さで存続させていただきたいという希望を持っています。これは、まさにCOE形成プログラムの主旨にそったものと言えるでしょう。

最後になりますが、研究拠点として「初期宇宙研究センター」設置をお認めいただき、予算的支援いただきましたことを理学系研究科各位に深く感謝申し上げます。また毎年3億円強の研究費処理を新たな人員増なしのまま、お引き受けいただいた理学部事務関係者に心から感謝申し上げます。

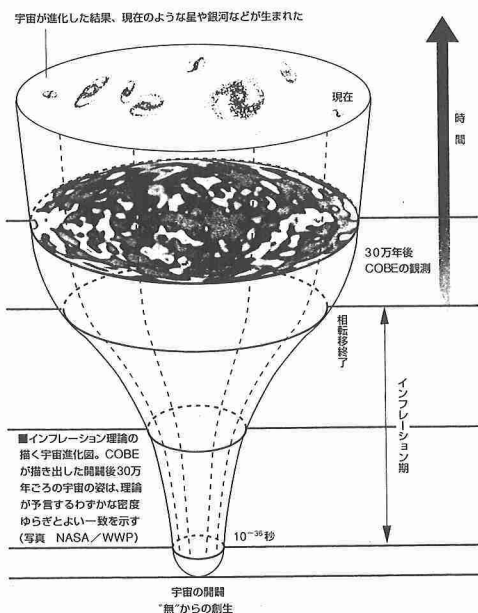


図1

素粒子的宇宙論によって描き出された宇宙の誕生から現在に到るシナリオ。量子重力の効果によって生まれた宇宙は直ちにインフレーションをおこしマクロな宇宙となった。インフレーションによって仕込まれた揺らぎは成長し現在の宇宙の構造ができあがった。

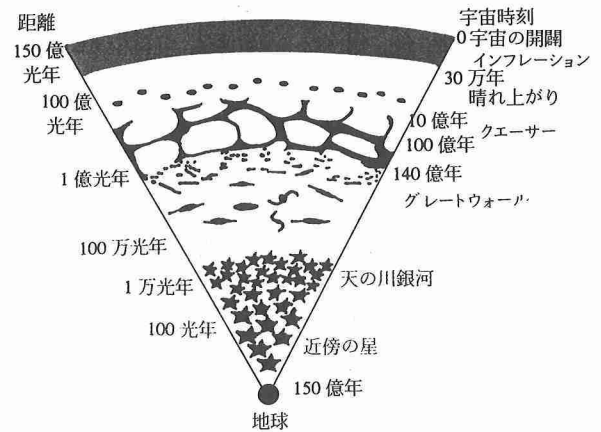


図2

宇宙では遠方を観測することは過去を観測することである。電磁波による観測では宇宙開闢から30万年ころの宇宙まで探ることができる。

初期宇宙に関する根元の問題と我々のアプローチ

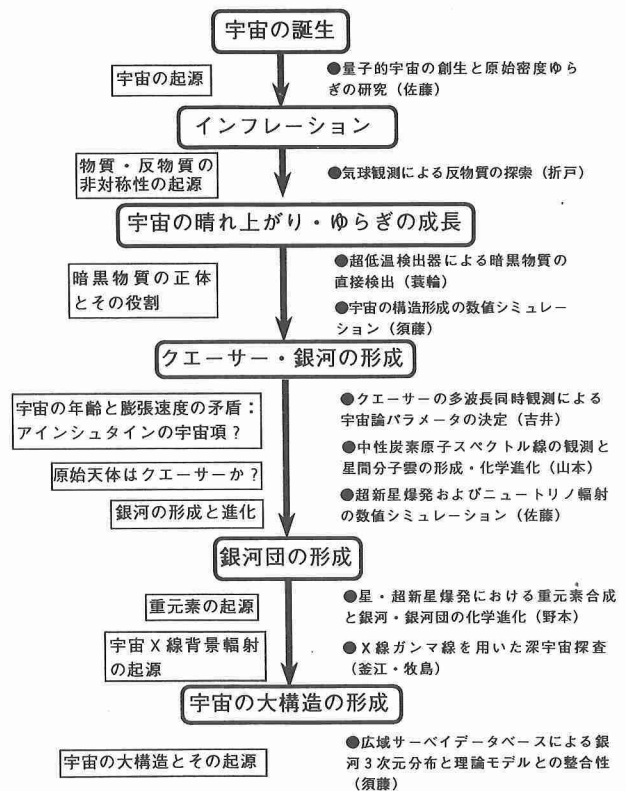


図3

# 「野本憲一教授の学士院賞受賞によせて」

尾崎 洋二 (天文学専攻)



当天文学教室の野本憲一教授は、東大教養学部（当時）の杉本大一郎教授とともに「星の進化と超新星の理論的研究」に対する功績により1995年度の学士院賞を受賞されました。私たち天文学教室のスタッフ一同にとってもこの上もない喜びであり、心からお祝い申し上げます。

野本先生は、昭和44年東京大学理学部天文学科を卒業、引く続き大学院に進学されました。大学院では、ちょうど教養学部（当時）に助教として着任された杉本大一郎先生の東大における最初の弟子として星の内部構造と進化の理論について研究され、博士の学位を得られました。その後、茨城大学助手、東京大学教養学部助手、助教を経て、平成元年理学部天文学科助教、平成5年教授に昇任されました。

学士院賞受賞の功績にありますように、野本先生は、星の進化、特に超新星爆発の理論に関しては世界的に見ても第一人者であります。今から9年前の1987年2月、お隣りの銀河である大マゼラン雲に超新星が出現し、世界の天文のコミュニティーは大フィーバーしましたが、その際の野本先生の活躍は目覚ましいものがありました。

超新星は、星の一生の最後をかざる大爆発で、その爆発は約1千億個の星からなる銀河全体に匹敵する明るさにまで到達するほどです。しかし、超新星爆発は1つの銀河で100年に1回か2回程度しか起こりません。さらにまた、私たちの銀河系自身の場合には、銀河円盤内の星と星との間にたゞよう塵により光がさえぎられてしまうので、たとえ銀河系内の遠くの方で超新星爆発が起こったとしても、見る事ができません。その結果、1605年のケプラーの超新星以来ここ400年ほどは肉眼で見えるほど近くで超新星が出現することはありませんでした。1987年に大マゼラン雲に出現した超新星は、望遠鏡による天体観測が始まって以来最初に我々の近くで起こった世紀の大イベントであり、天文学の観測、理論両方にとって貴重な超新星だったわけです。また、この超新星は当理学部にとっても因縁の深い星です。当時、理学部の素粒子国際センターの施設でありました岐阜県神岡にある「カミオカンデ」と呼ばれる装置で、この超新星爆発に伴うニュートリノを観測し、「ニュートリノ天文学」と

いう新しい分野を切り開いたからです。

野本先生は、それまで超新星爆発の理論的研究をされて来られましたが、大マゼラン雲の超新星が出現しますと、すぐにこの超新星について理論的アタックを始めました。そして、超新星の可視光、X線、 $\gamma$ 線、などの明るさおよびスペクトルの時間変化（光度曲線）について理論計算を実行し、この超新星の観測的特徴を説明することに世界に先駆けて成功しました。この超新星の場合、全天で一番明るい星の仲間に入るほど明るくなるだろうと予想されていたのですが、実際には予想に反して最初の10日ほどは4.5等、その後も最大光度でも3等にしかなりません。その原因として、超新星についてこれまで考えられていた赤色超巨星が爆発するというシナリオではなく、この超新星の場合には、より半径の小さい青色超巨星が爆発したものであったことを、野本先生は明らかにしたのでした。こうして、野本先生は、青色超巨星の爆発という新しい超新星の理論モデルを作ることによって、この超新星爆発の際に放射性同位元素ニッケル56が作られ、放射性元素の崩壊で鉄が作られることを初めて直接的に証拠づけることに成功したのでした。また、先生は、X線観測の分析から爆発の際に星の中で大規模な物質の混合が起こっていることを指摘され、2次元の数値シミュレーションを実行し、観測事実の基本的特徴を説明することに成功されました。

その後、1993年と1994年に、それぞれ比較的近くにあるM81、M51と呼ばれる銀河で超新星爆発があり、これらの超新星の理論でも野本先生は世界をリードする研究をなされました。ここでは紙数の関係もあり詳しくは述べませんが、野本先生は、超新星の研究だけでなく、それに関連した分野である宇宙における元素の合成、新星やX線バースト、中性子星の冷却過程、銀河の化学進化など広い範囲の分野で精力的に仕事をされ、それぞれの分野で優れた業績を挙げられています。

野本先生の御研究は、国内外に広く知られており、1989年には日本物理学会の仁科記念賞を大マゼラン雲の超新星の研究によって受賞されています。また、野本先生の御活躍の舞台は真に国際的で、欧米の天文学のコミュニティーでも Ken Nomoto といえば、知らない人はいないほどであり、世界中に沢山の友人、共同研究者を持っており、たぶん日本人天文学者としては世界的に最もよく知られた一人ではないかと、私は思っています。

野本先生が今回学士院賞を受賞されたことから、先生について長老の教授のイメージを持たれる方もいるかと思いますが、実は野本先生はまだ40代の若さです。野本先生がこれからも世界をリードする研究を続けられることと、私たち天文学教室一同期待しております。

## 私の専門分野

新井良一（生物科学専攻）



● 昨春4月に東京都新宿区にある国立科学博物館の動物研究部から生物科学専攻進化多様性生物学大講座に移動してまいりました。現在の私の研究室は仮の部屋で理学部2号館の動物学大講座の名誉教授室だったところです。平成8年度中には、本来の研究室に入室出来る予定ですが、ここしばらくは落ち着かない状態が続くと思われま

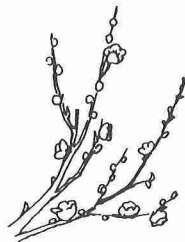
● 私の専門は系統分類学で主として魚類を扱っております。最近では代表的な淡水魚であるコイ目コイ科のタナゴ類を対象として系統分類と生物地理の関係を日本列島、中国大陸、朝鮮半島を舞台に調べております。ふつうタナゴといいますと釣魚として有名な海産のタナゴ（スズキ目ウミタナゴ科魚類）を連想される方が多いと思いますが、淡水魚のタナゴは全くの別物で、メスが産卵管を使って卵を生きた淡水の二枚貝の鰓に生み込む特異な習性をもっております。タナゴ類はユーラシア大陸温帯域の河川や湖沼に広く分布する体長10センチ以下の小型の魚で、春から夏にかけて産卵期になるとオスはきれいな婚姻色を呈します。コイ科の魚としては例外的に秋産卵の種もいます。種の数では東アジアが大変多く、日本では15種類で日本産の淡水魚の1割以上を占める、美しく

て、鑑賞魚としても有名な魚です。日本特産種が多いことも特徴的でミヤコタナゴ、イタセンパラの2種は天然記念物に指定され、採集したり売買することを禁じられています。ミヤコタナゴと東京大学との縁は深く、本種は附属植物園の池より採集された2個体に基づき東大の田中茂穂博士によって1909年に発表された種です。

私は日本産タナゴ類のルーツを追って昨年も中国へ出かけましたが、中国では専門家が少ないためか、異なる種に同じ名前が使われていたり、同じ種に異なる名前が使われていたり、種の整理もままならない状態です。新種になると思われるタナゴも数種いるようです。九州特産と考えられているカゼトゲタナゴらしいタナゴが中国に分布することも分かってきました。関東地方のごく限られた地域に生息するミヤコタナゴの近縁種は、従来、日本産タナゴのどれかの種と考えられていましたが、ここも怪しくなってきました。タナゴ類の生物多様性をグローバルな観点からとらえると、多くの問題点が残されていることを改めて思い知らされた次第です。中国旅行の余談になりますが、調査地点のひとつ、浙江省の奉化市溪口鎮は台湾政府の初代総統蒋介石の生まれ故郷です。中国政府のかつての政敵として蒋介石は現地では疎んじられていると思いきや、驚いたことに、溪口鎮は、蒋介石を目玉にした観光地になっており、こざい的なホテルで台湾からの観光客を大勢見受けました。

● とにかくにも、この1年は、多い会議、雑用、講義、手狭な研究室など、いろいろな意味で貴重な経験をさせていただきま

● 赴任当初は分からないことだらけで、とまどいでしたが、周囲の先生方や事務の人達の御好意で、なんとか大学の一員になれそうな気がいたします。今後ともよろしくご



# 分子集団遺伝学と分子進化学

田 嶋 文 生 (生物科学専攻)



集団遺伝学 (Population genetics) は生物集団の遺伝的構成がどのような法則の支配下にあるかを追究する遺伝学の一部門で、遺伝物質の究明を旨とする他の部門とならんで現代遺伝学における大きな流れの一つを形作っている。

木村資生著 集団遺伝学概論 (昭和35年) より

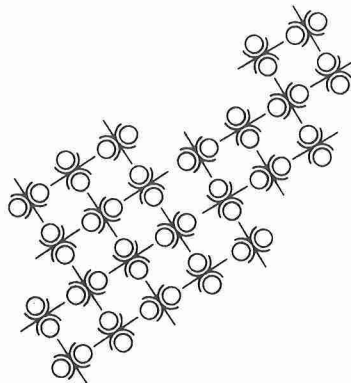
生物集団の遺伝的構成は、いまでは、DNA 配列情報によって知ることができます。最近の研究によると、ヒト集団から無作為に選んだ二本の DNA 配列を比較すると、その間で平均0.03~0.11%の塩基が異なっていることが知られています。このことは、同じ DNA 配列をもっている人が (一卵性双生児を除くと) 地球上に存在する可能性はほとんどないことを意味しています。生物集団の遺伝的構成が均一でない現象を多型といいます。たとえば、ABO 式血液型を支配する遺伝子は多型的です。DNA 配列情報に基づく多型を、とくに DNA 多型といいます。

DNA 多型の保有機構を解明することは、私の研究テーマのひとつです。DNA 多型の保有機構として、中立突

然変異説、平衡淘汰説 (超優性淘汰説や頻度依存性淘汰説)、純化淘汰説 (弱有害突然変異説や微弱有害突然変異説)、平衡転移説などが提唱されています。DNA 多型の量を調べてみると、高い変異を維持している生物集団とそうでない生物集団、変異の高い遺伝子と低い遺伝子、変異の高い DNA 領域と低い DNA 領域、変異の高い塩基部位と低い塩基部位があります。このことは、DNA 多型の保有機構はひとつではないことを意味しています。また、いくつかの保有機構が相互に関係していることも考えられます。

分子レベルの集団遺伝学 (分子集団遺伝学) と分子レベルの進化学 (分子進化学) は切ってもきれない関係にあります。というのは、現存する生物集団の DNA 多型は、過去に生じた突然変異が自然淘汰などのさまざまな要因の影響をうけた結果であるからです。また、ある生物種に保有されている DNA 多型がその生物種自身の形成時期より古いこともまれではありません。(分子レベルの進化機構と DNA 多型の保有機構は同じもので、DNA 多型は分子進化の一断面にすぎないとも考えることもできますが) 分子レベルの進化機構を解明することも、私の研究テーマのひとつです。

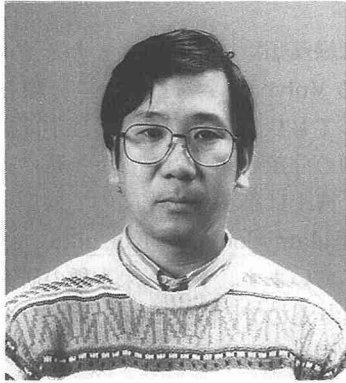
私たちの研究室 (進化多様性生物学大講座集団生物学研究室) では、実験は行なっていません。理論的研究を行なっています。そして、DNA 多型の保有機構を解明するための分子集団遺伝学および分子進化学の数学理論を確立したいと思っています。また、理論から予想される DNA 多型の量やパターンを実験結果や検察結果と比較することによって、DNA 多型の保有機構の解明に一歩でも近づきたいと思っています。





# Face-to-Face

栗田 敬 (地球惑星物理学専攻)



以前コロラド州の小さな町にいた時、その町が大変気に入られ離れがたく思いました。その町の自然や文化的環境もいくぶんかの理由でしたが、このように気に入った最大の原因は町の小ささにありました。人口10万あまりの大学を中心とした町はどの方向へ車を走らせても10分もすれば市境界を超えて砂漠、荒地に入り、“我々が住んでいるのはこの町だ”と実感できます。街で出会う人々もこの小さな町と一緒に住んでいると思うと何となく親近感、連帯感が湧いてきます。街路も公園も商店街もコミュニティの情報もみんな知っている気軽さがあります。一方私が住んでいる日本の町では町はずれというものがなく、どこまで行っても見たことのない町がずっとその先まで続いている、知らない人が行き交っている、町を歩くたびに不安な気にさせられます。この漠然とした不安に馴れていた身にとってはコロラドの小さな町は心休まるすてきな場所で、“人間サイズの小さな町のよさ”に目を見開かされました。しかもその“快適さ”は単にこじんまりしたという意だけではなく、人間の活動しやすいサイズという裏打ちがあった様な気がします。

私は前任地の筑波大学にいた時にこれと似た経験をしました。色々と不満な点もありましたが大学は適度に小

さく、例えば大学内のどこかでどのようなことが進行しているのか、知ることができ、それに対して発言・関与することもできました。また小ささの故に、個々の集団は分断・断片化されておらず異なった分野の研究者と様々な相互作用が可能でした。学生と教官の間の距離も極めて近いものでした。小ささに起因する教官同志、教官・学生間のFace-to-Faceな関係は大学への高い帰属意識、一体感を引き起こしています(もちろん短所にもなりますが)。この小さいことの快適さはコロラドの小さな町の快適さに通じています。我々が機能的に働ける大学には適正なサイズがあるのではないかと感じます。これと比べると東京大学は少々大きくなり過ぎているようです。大学の片隅で進行していることは我々にはなかなか見えてきませんし、断片化した学科、学部で隔てられた異なった分野の人間との間には様々な山・谷の要害があるように見えます。したがって如何に東京大学が幅広い分野の研究者を擁していようと、構成員間の相互作用は極めて身近なものに限定され、かえって自由さがないように見えます。このために学科にこそ帰属意識を持つものの、学部や大学への帰属意識は浅薄ですし、有機的な機能集団としての東京大学をイメージすることは難しい状況です。

この少々大きくなり過ぎた東京大学においてどのように幅広い分野の人間とFace-to-Faceな関係を作りだしていくのか、自分の個別の研究テーマとともに今後考え続けてゆきたい課題です。

なお私が興味をもっている問題は地球や惑星の内部の様々な進化プロセスですが、均質なものから分化(局所化)したものを作り出すプロセスに魅かれています。今後理学部でよろしくお付き合いをお願いいたします。



# 自己紹介

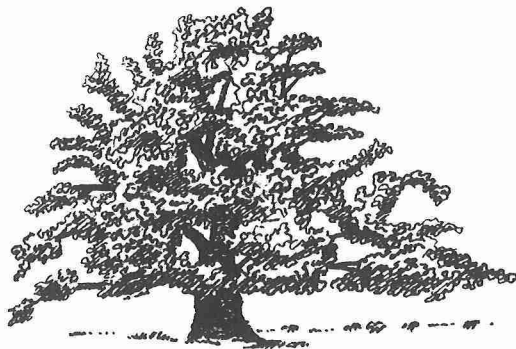
野 崎 久 義 (生物科学専攻)



平成7年4月1日付けで大学院理学系研究科・生物科学専攻・進化多様性生物学大講座に助教授として赴任してまいりました。3月まではつくば研究学園都市の国立環境研究所に3年間勤務しておりました。つくば研究学園都市では(自動車の運転ができなかった為に)、毎朝夕の片道20分のサイクリングを楽しんでいましたが、こちらに来てからは千代田線のラッシュアワーに閉口する毎日であります。

研究の方は緑藻類特にクラミドモナスやボルボックスに代表される Volvocales を用いた、分類と進化の研究を18年間致しております。東京大学理学部植物学教室でこの様な藻類の分類研究をなされた先輩には中野治房博士がいます。博士は小石川植物園内で採集した材料を基に1917年に *Chlamydomonas Koishikawaensis* という新種を記載しています。それ以来本種の研究または採集記録がありませんので、私はこの「幻のクラミドモナス」を小石川植物園から再発見してその実体を明らかにして行きたいものとも思っております。また、環境研で開始した今や「絶滅に瀕する車軸藻類」の自然保護的研究も現在引き続き行っております。

新しい大講座なので現在は実験施設・空間を整えつつあるという状況です。東京大学の良き伝統の上に立ち新しい「多様性と進化」の学問を築き挙げて行きたいものと思っておりますので御指導・御鞭撻の程を宜しくお願い申し上げます。



# 大学と国立研究所

茅 根 創 (地理学専攻)



昨年4月に地理学教室に転任してまいりました、茅根創(かやね・はじめ)と申します。研究対象は海岸・沿岸域で、とくにサンゴ礁と地球環境との関係について、サンゴ礁に記録された過去の環境変動の解析、地球規模の炭素などの循環におけるサンゴ礁の役割などについて研究しています。サンゴ礁は、生物自身が地形を作りそれによって物理環境が変化し、また生物が生元素の循環を駆動し地球規模の物質循環にも関わっているという、学際的な視点が必要な魅力的な対象です。年間数10日間は、琉球列島、ミクロネシア、オーストラリアのサンゴ礁に出かけ、サンゴ礁に穴をあけたり、潜って機器を海底に設置したり、海水の二酸化炭素濃度を測ったりしています。

それまでは、つくば市にある通産省工業技術院地質調査所という地球科学系の国立研究所に在籍していました。一昨年つくばに新居を購入したところ、マーフィーの法則に従って転任することになりました。大学と国立研究所とでは、研究の進め方や研究環境が大いに異なります。一般のイメージとしては、大学は少ない研究費と劣悪な環境で基礎研究の高い成果をあげているのに対して、国立研究所は潤沢な研究費と最新の研究環境で社会的要請の高い(目先の)成果を追っている、といったものでしょうか。ハードの研究環境の優劣については一目瞭然ですので、ここでは研究費と研究成果について、私が在籍した地質調査所と理学系研究科とを手持ちの資料で比較して、このイメージを比較してみます。重大な見落としや事実誤認があるとは思いますが、随想ということでご容赦下さい。

地質調査所は、研究者数が226人です。経常研究費は9億6千万円で(施設整備費・運営費を含む)、このほか、通産省、科学技術庁、環境庁などから地震、地熱、環境、海洋など目的指向の強いテーマについて研究費を取っており、これが13億7千万円になります(平成7年度地質調査所要覧)。一方東京大学理学系研究科は、教授・助教授・助手の総数が224人です(平成7年度理学部便覧)。校費は17億8千万円で(教授会資料)、科学研究費は14億7千万でした(学内広報、No.1044,1995年)。

数字だけ比べると、地質調査所の研究者数・経常費以外の研究費と、理学系研究科のスタッフ数・科学研究費の額は大変近いことがわかりました。

研究成果の方はどうでしょうか。理学系研究科では1,100篇程度の原著論文を生産し、その多くは国際学術誌に公表されたものです(発表論文リスト 1994年)。一方地質調査所における原著論文の公表数は150篇程度で、国際学術誌はその半数程度です(平成5年度地質調査所年報)。一人当たり論文生産数は、理学系研究科5篇/人に対して地質調査所は0.7篇/人で、原著論文数を尺度とする限り理学系研究科の生産性は地質調査所の7.5倍になります。

しかしながら国立研究所と大学とでは、人的資源について重大な違いがあります。学生の存在です。理学系研究科に在籍する大学院学生は修士課程812人、博士課程747人です(学内広報、No.1027,1995年)。研究費総額が近いにも関わらず国立研究所の研究費が潤沢であるように感じるの、大学ではとってきた研究費で学生を「食わせ」なければいけないからではないのでしょうか。理学系研究科の原著論文数も、大学院学生が筆頭、共著のものを含んだ数です。一人当たり論文生産数は、生産性の高い博士課程の学生だけを加えると1.1篇/人に、修士課程の学生も加えると0.6篇/人になります。

以上から、「大学は、少ない研究費で高い成果をあげている」というイメージにおいて、少ない研究費の所では学生を(食わせるべき対象として)カウントし、高い成果のところではカウントからはずしているのではないかと、という暫定的な結論が得られました(もちろん論文の質や研究費の使われ方など、考察すべきことは多いのですが、あくまで随想の暫定的な結論ということでご容赦を)。さらにいうならば学生は、研究費を食いつぶすものではなく貴重な人的資源です。若手の研究者を雇用するのに年間300万円必要であるとして、理学系研究科は、1559人分47億円の人的資源があるわけで(しかも彼らは、逆に授業料を支払って夜も寝ないで研究をしている!)、これがストックではなくフローであるという点も重要です。これは国立研究所では望むべくもないものです。この計算は数字の比較のために行なったもので、大学がこの貴重な人的資源を一方的に収奪しているというのはあまりに皮相的な言い方でしょう。むしろ学部学生も含めて学生への教育を通じて自身の研究活動に得るものがきわめて大きいのではないのでしょうか。ハードではなくソフトの研究環境として大学は、国立研究所に圧倒的にまさっていると思います。

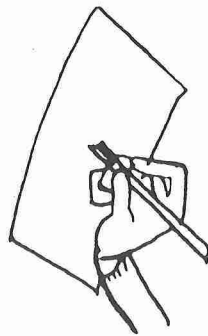
私自身転任にあたって、国立研究所と大学のメリット、デメリットについていろいろと考えました。研究費の獲得に伴う行政との対応が、年齢を増すごとに増えていま

した。社会的要請に基づく研究より、基礎的体系的な研究を落ちついてやりたかったこともあります。しかし国立研究所にも、アドミニストレーションをスマートにこなす自らの研究テーマと行政の要請を巧みにすりあわせて、大学ではやりにくい大きなプロジェクトを立案している中堅の研究者が大勢います。私が大学に転任する際にもっとも期待したのは、学生との接触です。そして学生が興味をもち、それを学生自身が具体的な問題としてとらえ解決する様な教育、指導ができないかと考えて、この1年努力してきました。これまでのところ、こうした努力が裏切られることはありませんでした。

大学に来て、大学と国立研究所の性格が近づいているように感じました。欧米による日本の基礎研究ただ乗り論以降、行政側も国立研究所に対して基礎研究シフトを盛んに説くようになってきました。一方で大学は、研究について社会的要請を考えるよう求められています（東京大学 現状と課題）。また科学研究費はプロジェクト型研究の比率が高くなり、科学研究費以外の大きな研究プ

ロジェクトにも大学の研究者が様々な形で関わるようになったとききます。大学人も象牙の塔にこもって「武士は食わねど」ではすまなくなったということでしょうか。しかしながら大学と国立研究所の研究環境とそれを支えるシステムには、それぞれ特徴があります。国立研究所では、行政側の要請に応える研究を立案、実行するための行政とのすりあわせ作業（アドミニストレーション）に多くの人手と時間を割いており、大学の研究がプロジェクト化すればこうした作業の必要性はますます増えて行くでしょう。一方大学の最も大きなメリットは学生という人的資源をもっていることで、この資源を有効に活用し育てることがもっとも重要であると、私は考えます。

転任して2年目の課題は、教育と私自身の研究をどのように組み合わせるかということです。そのためには、私がもっともおもしろいと思っているサンゴ礁に学生を連れていけるだけの研究費はとらんといかんなど思っているところです。





# 霊長類移動運動の発達と制御

木村 賛 (生物科学専攻)



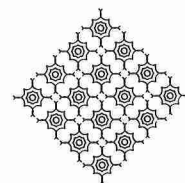
一昨年の夏、文部省国際シンポジウム開催経費を得て「霊長類移動運動の発達と制御 (Development and Control in Primate Locomotion)」を開催しました。この出版原稿の編集がようやく終わり、出版社に発送したところです。スイス Karger 社から出ている *Folia Primatologica* という雑誌に特集のかたちで載る予定です。

一般の陸上四足哺乳類と比べて霊長類(サルとわれわれヒトの仲間)の移動運動にはいろいろな特徴があります。とりわけサルにみられる前足と後ろ足とが機能分化しているという特徴には興味を持っています。それはこの分化が、ヒトの特徴である直立二足歩行の進化過程での獲得に直接関係していると考えられるからです。霊長類の移動運動は近年研究が進んできてはいます。しかしこの個体発達の研究はまだ遅れています。現生のサルで移動運動とくに二足歩行の個体発達を調べることは、ヒトの系統発達での二足歩行獲得過程を知る手がかりを与えてくれると期待されます。また運動の制御、とくに神経制御については霊長類ではまだほとんどわかっていません。神経制御の検討は直接にヒト特有の大きく複雑となった脳の獲得過程とつながるものです。このように霊長類の移動運動の研究はヒトの解明のために重要な役割を持ちます。移動運動研究のうち、これらのまだ不十分な分野についての最新の研究を討論するためにこのシンポジウム開催したわけです。これらの討論を踏まえて参加者に論文を書いてもらい、まとめることができました。

内容について少し紹介しますと、まず最初に基礎的な筋骨格系の機能形態学の論文がいくつかあります。筋骨格系の主な機能は支持運動を行うことですから、この機能形態学とは生体力学、生体機構学の立場からの解析が主なものとなります。現生生物の解析を化石の解釈に応用する検討がなされています。またこれから、化石を知ることにより運動生態の系統発達を検討することも行われました。霊長類運動器の個体発達についての知見も増えました。次いで、移動運動そのものの実験的研究論文がいくつかあります。こどもの運動は変異の大きなものですが、それがどのようなもので、どのようにおとなのものへと取れんしていくかが調べられています。とくに

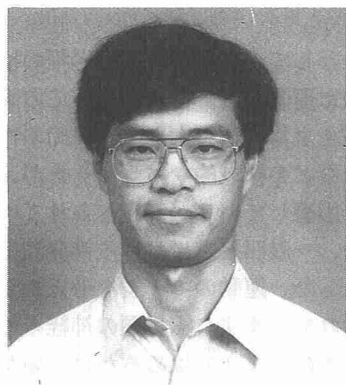
サルをモデルとしての二足歩行獲得過程の検討がなされました。最後に運動の制御機構についての実験および理論的な論文がきます。体の大きさ、体節の物理定数、関節運動、呼吸などの機械的なパラメータが、運動や姿勢にどのように影響しているかが調べられています。そしてヒト、サル、一般四足獣における神経制御の比較検討が試みられました。運動のモデルを考えた上でその実験的検討も行われています。霊長類の神経系は一般四足哺乳類のものをそのままあてはめるわけにいかないところがあるようです。神経制御の問題はまだこれからさらに検討しなければならない問題です。この特集の内容は、総説も含めて、すべて形態、姿勢、運動についての実験的ないし定量的データに基づいた検討がなされています。霊長類の移動運動の多彩な観点からの研究が、シンポジウムでの討論をふまえて統合の方向にまとめられたと思います。今後の霊長類移動運動、とくにヒトの歩行研究の発展に役立つものと考えています。

シンポジウムも特集の編集も、非常勤でお願いしていた秘書の方に助けをもらってやってきました。最後のまとめのところで東京大学へ移り、秘書の方なしとなってしまって苦労しました。承知のはずではありましたが、秘書もいない技術職員もいないという日本の研究体制の貧しさを身にしみているところです。前に聞いた話では、事務官、技官増員の概算要求は絶対通らないので、大学本部、文部省が受け付けてくれないのだそうですが本当でしょうか。一方で定員削減により次々と人が減っています。あと何十年かすると日本中の大学は教員という名の雑用係だけになるのではないのでしょうか。大学など日本の公的研究機関の施設設備の貧しさについては最近報道もされ、多少関心も持たれるようになったようです。しかし研究援護、包括を行う人員の問題についての認識はまだまだのようです。数だけでなくその待遇なども含めた早急な充実なしには、今後の研究教育の発展はおぼつかないのではないのでしょうか。



# 東京大学に着任して

相原博昭 (物理学専攻)



大学院2年生の時に、日米高エネルギー物理学協力事業による実験のために、カリフォルニア大学ローレンスバークレー研究所に送られて以来、途中2年間を除いて、ずっとバークレーで仕事をしてきたが、昨年10月、理学部物理教室の一員に加えて頂くこととなった。高エネルギー物理学研究所のBファクトリーを使った実験で、素粒子反応の対称性についての研究を進めて行こうと思っている。理学部、そして物理教室は、新参者に対して暖かく（あるいは、誰に対しても暖かいのかもしれないが）、研究室を立ちあげていくのに快適な環境を提供して頂き感謝している。

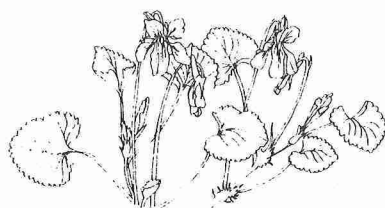
ここ数年の間、バークレーとシカゴ近郊にあるフェルミ国立研とを2週に1度往復するという生活をしてきて、frequent flyer の mileage を稼いできた。高エネルギー物理屋にとって、世界最高エネルギーの加速器（フェルミのテバトロン加速器が現在最高）で仕事をするというのは、やはり楽しく、かつ、やりがいがある。私の属していた実験グループには、約400人程の研究者がいたが、テバトロン加速器での物理は未開拓で、私としてはいろいろ好き勝手なことをさせてもらったと思っている。幸いにして、トップ・クォークの発見にも貢献できた。昨年3月、公式発表の前、シカゴにいるグループリーダーと連絡を取りながら、バークレーの所長と副所長に事前説明に行ったが、妙な興奮を味わったのを覚えている。

誰もが、もう一つの実験グループに遅れを取るまいと、競争心むき出しで働いていた。その後、約一年経って、トップ・クォークももはやただの素粒子である。

バークレーでは、研究所員の義務として、女性を含む minority の問題、環境保護や仕事場の安全性 (Environmental Health and Safety) など様々な社会的問題についてのトレーニングを受けさせられた。私は、もちろん、いやいや、かつ、いい加減に受けていたわけだが、それでもこれらの事についての sensitivity は若干高められていたらしく、東大理学部の女性や外国人の教官の少なさなどには改めて感心した。

二人の子供達は、始めは、アメリカに帰りがたっていたが、やっと日本の学校にも慣れてきたらしい。上の子は、給食がうまいと言っている… アメリカの小学校の算数は、噂どおり、お粗末であったが、チビの時から、何らかの形で意見をまとめ、それを稚拙ながらも文章にするというトレーニングには多くの時間をさいていた。この点は、日本の学校でももっとやったらいいと思う。バークレーやその近くのスタンフォードには、すばやく論理を組み立てて、はっきりと（時には強引に）主張していくタイプの研究者が多く、その中で自分のやったことをちゃんと評価してもらうのは容易ではない。もちろん、所によってはそれをやり過ぎるとしっぺ返しを喰うので、自分の回りの文化に配慮する感受性も鍛える必要がある。無理か…

高エネルギー物理実験の分野も、日本/アメリカ/ヨーロッパにあるファシリティー（主に加速器）を国籍に関係なく誰もが自由に使える環境が整ってきた。大きな実験グループにいと、いろいろな大学の学生さんに会うが、東大の学生さんのレベルが極めて高いのは事実である。私も、どのような学生さんが研究室に来るのかを楽しみにして（もちろん優秀に違いない）、研究・教育に励んでいきたい。



## 着任のご挨拶に代えて

西田 生 郎 (生物科学専攻)



平成7年10月1日付で着任しました。同じ日に生物科学専攻(進化多様性)に着任した上島さんとは、昔サッカーの試合で敵味方に別れて戦ったことがあり、学部長室での思わぬ再会に奇遇を感じました。前任地は、岡崎国立共同研究機構・基礎生物学研究所です。専門は、“植物脂質代謝生化学”ですが、基礎生物学研究所在任中のこの10年ほどは、“植物の低温耐性における生体膜脂質の不飽和化の重要性”について分子生物学的手法を取り入れて研究してまいりました。これからは、従来の研究分野を発展させるとともに、“環境植物生理学”という新しいアドバルーンのもとで、植物のストレス環境とのつきあい方、ストレス耐性のしくみを解き明かしたいと考えております。着任にあたり、なにか書けという依頼ですが、小学校以来作文と読書感想文は大の苦手の私ですので、私の経験した研究所と大学について感ずるまを述べることにいたします。

岡崎国立共同研究機構(岡機構)は、愛知県岡崎市の中心地に近い小高い丘の上に立つレンガ色の建物で、分子科学研究所、基礎生物学研究所、生理学研究所の三研究所から構成されています。「研究所は、プロジェクト推進のための組織である。」という考え方がありますが、岡機構は、これを国内で最も徹底して行っている研究機関であると思います。必然的に、組織はコンパクトであり機動力がありました。教官—事務官—技官の連携は、

大学にくらべて一段とスムーズであったと感じます。今でも有り難かったと感謝していることは、いろいろな書類の締め切りを事務官の方々にずいぶん大目に見ていただいたことです(つまり、大学でも少しは大目に見てくれという私のささやかなお願い)。外国人研究者が多いのも、岡機構の特色の一つです。過去十年間で、研究室を訪問した外国人の総数は100人を下りません。外国人研究者の研究面、日常生活の世話などは助手の仕事に含まれるので、ずいぶんやっかいなケースもありましたが、国内にいながら国際経験を積むことができるというメリットの方が多かったと思います。また、研究所にいる数少ない院生たちはすぐに英会話が上達しました。研究費は大学にくらべるとずいぶん潤沢にありましたが、時間をお金で買うような無駄な使い方も多かったように思います。短期間で研究成果をあげるという性格上、時間をかけた教育には全て不向きであると感じました。

大学での活動で最も印象に残っているのは、オブザーバーとしてはじめて参加した大学院の面接試験でした。“教育機関”あるいは“研究者育成機関”としての大学院を選ぶ側から初めて体験したわけですが、受験生の目的意識、研究意欲を尊重する選抜方法は、研究所経験の長かった私にとってはとても新鮮に感じられました。また、その後の大学院教育を見ても、学生の将来の独創性の開花を時間をかけて待つなど大学(院)でなければできないやり方であると思います。このような反面、なかなか研究の視点の定まらない学生は、救済されにくいのではないかと思います。着任してから5カ月の短い期間で、入学試験、講義、修士論文審査など大学人としてのメインメニューのいくつかをこなしてきました。そのどれもが大変重要で、骨の折れる仕事であることを実感しております。しかし、これで、「研究所の先生は雑用がなくて楽でよい(本当は雑用もあり楽ではないのだが)」という研究仲間からの冷たい視線から解放されるのは私にとっての小さな喜びです。



# 植物園雑感

福田 裕 穂 (植物園)



今春、植物園にちょっといいことがありました。技官の下園文雄さんが、長年にわたる小笠原の絶滅植物の保護の仕事により、松下幸之助花の万博記念賞を受賞したのです。下園さんをリーダーとする植物園のチームは、小笠原固有の植物で絶滅の危機に瀕しているムニンノボタンをはじめ数種の株を植物園に持ち帰り、組織培養を用いて繁殖させ、それを再び小笠原に戻すという作業を行ってきました。その結果、自生していた親株が枯死する直前に、植物園で生まれた新しい株を小笠原に根付かせることに成功したのでした。新たな培養法の確立からはじめて、植物の栽培法、小笠原で根付かせるまでの努力、さらには、なぜ小笠原で絶滅しようとしているかについての生態学的な考察まで含んだ仕事が高い評価を受けたわけです。その詳細については、下園さんにおまかせすることにして、この受賞に触発されて私が植物園について考えたことのいくつかを記しておきたいと思います。

私は昨年10月に着任したばかりで、下園さんのこれまでの仕事をかなり客観的に評価できるように思うのですが、私からみて下園さんの仕事ですばらしいと思ったのは、その内容はもちろんですが、この仕事が、植物園、東京都、環境庁、小笠原の多くの人たちの協力によって成し遂げられたということです。言うまでもないことですが、自然保護の仕事は個人ではできず、多くの人の献身的な協力の下にはじめて可能になります。下園さんの

仕事はまさにそのような幸福な例だと思います。そして、このような文脈において植物園がサイエンスの面からも、実際の面からも自然保護の中心的役割を果たせたことを誇りに思いました。植物園は、このような実践に加え、教育の面からも、今後とも社会の中での自然保護・種の多様性維持への積極的な貢献をしていく必要があるのだと考えています。

植物園は多様な役割を担っています。理学部附属の植物園として、学部・大学教育への貢献、進化多様性および形態・発生研究の世界的中心地としての役割、一般に開かれた植物園として人々の憩い、社会教育の場としての役割、そして、自然保護・多様性維持への協力。いずれもやりがいのある仕事で、今後ますます、植物園の重要性は増していくものと思われれます。一方で、多岐にわたる植物園事業は、近年その仕事量が急激に増加し、限界に達しています。そのしわ寄せは、植物園の事務局、技官、教官の過労働という形で現れています。理学部のご厚意により、植物園の中の施設は少しずつは良くなってきています。しかしながら、昭和38年当時、小石川、日光両植物園合わせて20人いた技官は、現在半分の10人で、今年退官になる植物園の生き字引とも言われる技官の方の後任の補充もありません。また、日光の分園の教官ポストも、教官の転出後、補充する許可が下りず、分園の業務に支障がでつつあります。植物園予算も――愚痴が限りなく続いてしまいそうなので、この辺でやめておきますが、いづれにしても、理学部の皆様の暖かいご支援が植物園事業を行う上で是非とも必要であり、ご支援を切にお願いする次第です。

原稿を書いている今、植物園の梅が花盛りです。非常に多くの種類の梅が、青い空に映えて咲き誇っています。4月には、小石川植物園は桜で埋まります。植物園は、大げさに言えば、私たち人類が生き延びるための自然に対するあり様を、都会の中で最も身近に感じとれる場であると思います。皆様も、命の洗濯に、植物園にいらしてはいかがでしょうか。





## 『新しい言葉』

深田 吉孝 (生物化学専攻)

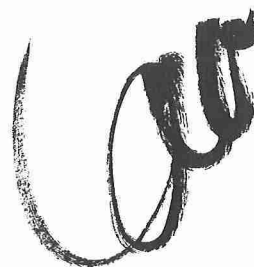


新任教官の自己紹介というと、皆さんは一体どんなことを書いておられるのだろうか。少し気になって、これまで勤務していた教養学部の学部報をいくつか拾い読んでみた。そこで目についたのは「〇〇年ぶりにこの駒場に帰ってきてみると…」というフレーズで、本学出身者の多さに改めて驚かされた。小生がかつて勤務していた教室(京大・理・生物物理)は比較的新しい教室ということもあってか、教授の多くは他大学出身だった。ヘテロでない集団では十分なガイダンスが得られず、よそ者は事情がわからず苦勞することがある。3年前、この大学(教養学部)に来て悩まされたのは教育面での「言葉」だった。例えば「シンフリ」を知らない私には、単位の懇願に来た前期課程の学生が「ドラは困る」だの「シケタイが悪い」だの呪文を唱えてもチンプンカンプンで、早々にお引きとりいただくしか術がなかった。このような言葉の延長線上には、「業界用語(研究室スラング)」がある。卒業研究で研究室に配属されて「サチる」という言葉を知って感動し、これを何とか使ってみたいと思った。「業界用語」を使うことは、その言葉が通用する「業界」の一員であることを示すように思えたからだ。

ところが、このような自分の過去を差し引いてみても、最近使われ始めた「新しい言葉」の危険性と、感染力の強さには寛容でいられない。この言葉の特徴の一つは、句点(まる)を避けて、やたらに文章を続けるところにある。「…でエ、…するシイ、…だけどオ…」という会話はよく耳にする。延々と文章が続くので、書くとバレるが聞いていると何気なく耳に入ってしまうのが恐ろし

い。拒絶反応を起こさせないことが、強い感染力の原因の一つのようだ。この言葉は(少なくとも私の)研究室の一部の院生に感染している。セミナーの発表で「…なんですけどもオ、…でしてエ、…という訳でエ、…」という院生に気づいた。「…です。従って…だと思います。」といった断定的な表現を避けて結論をぼやかし、明確な主張をせずに保身しているのである。同じ理由だと思うが「新しい言葉」には、文章全体をぼやかす「いちおう」「とりあえず」といった言葉を多用するという特徴もある。「とりあえず試みましたが、いちおうネガティブでした。」これらの副詞は英文科学論文では訳しようのない、つまり多くの場合、あり得ない言葉である。もう一つの特徴として、文章の途中で軽く切って疑問文のような発音を挿入する語法がある。「…のクロストーク?みたいな現象が…」抑揚を上げて相手の様子を探るので、聞いている方は、その言葉に反応することを強要されている錯覚に陥る。相手の様子を見つつ、矯正あるいは反論される気配を察知するや身を翻して逃げよう、という会話用法のようでもある。

スペースの都合もあるので、この辺りで止めるが、「新しい言葉」のエッセンスは「曖昧さ」であり、書き言葉にすると決して通用しない。ゆえに、この言葉の達人に文章を書いてもらおうと、小学生の感想文のごとき文章が出来上がる。私は当初、この言葉は若手のテレビタレント等だけが(意識的に)使う特殊なものだとたかをくくっていた。しかし、すでに書いたように、この大学の研究室にも若い感染者は多い。ゾッとするのは、ふと自分の口からも飛び出してしまうのである。自戒をこめてひとつ自己紹介を。「私の研究はア、外界の光シグナルが網膜の視細胞?なんかでどんなふう情報変換されるか、という研究なんですけどもオ、いちおう蛋白質の分子レベルが中心でしてエ、最近では、サーカディアンリズム?みたいな生物リズムがア、地球の24時間の明暗周期に同調することを利用してエ、脳の時計細胞の光シグナル伝達過程を調べることによってエ、とりあえず生物時計が発振するメカニズムを調べたいと思うてなんですけどオ、」…嗚呼。



## 《退官者の挨拶・退官者を送る》

### 本郷1956 — 1996



富 永 健 (化学専攻)

私が理学部化学に進学したのは1956年(昭和31年)で、以来この3月まで40年間のほとんどを本郷の理学部でお世話になったことになる。

化学科進学のに御退官の木村健二郎先生の後任として無機化学、さらに放射化学講座を担当された斎藤信房先生の研究室に入れていただき、1958年から大学院の研究生活が始まった。私のテーマは「錯体のホットアトム化学の研究」であったが、核変換に伴う化学反応を対象とするホットアトム化学は、当時のわが国の乏しい研究設備のもとで、放射化学の分野で国際的に太刀打ちできる数少ない研究課題の一つであった。大学院時代(1959年)に、初来日したF.S.Rowland教授(当時はKansas大)に注目されたのが、その後今日に至る彼の長いおつき合いの始まりである。

1963年、博士課程修了とともに理学部化学科(斎藤研究室)の助手に採用された。発見されてまもなくノーベル物理学賞(1961年)が与えられたメスバウアー効果の化学的応用に、東大からお茶大水に移ったばかりの佐野博敏博士らとともに取組んだのはその頃のこと、鉄錯体の光・放射線分解への応用はこの分野の開拓的な研究となった。

1967年から一年半をカリフォルニア大アーバイン校のRowland教授のもとで博士研究員として過ごして帰国すると、東大では紛争が激しくなりつつあった。慌ただしい情勢の中で1968年講師に昇任、久保学部長のもとに設けられた若手教授会メンバーからなる幹事会に加えられたが、これは化学科以外の理学部教官との交流を深める最初の機会となった。

1973年、大磯で第1回の放射化学日本協力セミナー(日本側代表者:木村健二郎名誉教授;米国側代表者:F.S.Rowland教授)が開催され、当時助教授であった私がScientific Secretaryとして会議のお膳立てを行った。この日米セミナーは、放射化学のほぼ全領域にわたり日米の主導的研究者が参加したもので、以後のこの分野における日米の研究協力や人的交流を促進するの

に重要な役割を果たしたが、私自身もA.P.-Wolf,G.R.Choppin,R.H.Herber教授ら著名な学者を知己に得て今日まで交流は続いている。因みに第2回の放射化学日米協力セミナーは、私が日本側代表者となって1982年米国で開催された。

1977年、教授に昇任し、恩師斎藤信房教授の後をうけて放射化学講座を担当した。斎藤研究室でのテーマであったメスバウアー分光法は、引き続き新たな応用や測定法の開発によってさらに発展させた。また、この後1987年に、山中湖畔で第13回国際ホットアトム化学シンポジウム(IHACS XIII)を組織委員長として主宰することになるが、私の興味はすでにホットアトム化学から無機光化学・レーザー化学、さらには中間子化学へと移りつつあった。

一方、Rowland教授が1974年に指摘したクロロフルオロカーボン(いわゆる特定フロン)によるオゾン層破壊の地球環境問題としての重要性には早くから注目していたが、当時わが国では大気化学の研究者はほとんどいなかった。1978-9年にトヨタ財団からの研究助成を基にして、オゾン層破壊や温暖化の原因となる大気中微量成分ガスの精密分析に着手し、現在まで17年間にわたり南北両半球のバックグラウンド濃度の観測を続けてきたが、今日では、われわれの分析法や測定値は世界的に最も信頼性の高いものとして認められている。

理学部の教授会メンバーとしての27年間には、人事委員長、会計委員長、教務委員長、企画委員などを一度ならずおせつかり、理学部には大してお役に立てなかったものの、私自身はこれらの委員会で多くの他学科の先生方と接する機会を得て幸いであったと思っている。この他、地殻化学実験施設には創設以来の運営委員、および施設長として2期ご縁があった。また、理学部放射線管理委員長として10年ほどアイソトープ・放射線関係のお世話をさせていただいた。

全学の方でも、1988年から3年半ほど東京大学放射線安全委員会の委員長をつとめたが、その間に病院のアイソトープ問題が発生し、その対応や安全管理体制の抜本的見直しに当時の有馬総長にもいろいろご心配いただくことになったのは苦い経験である。引き続いて1992年から東京大学アイソトープ総合センター長という責任の重い仕事を引き受けているが、こちらは「無事これ名馬」をモットーに4年間の任期をどうやら順調につとめ上げられそうである。

近年、地球環境問題への関心が高まるとともに、私どもは、オゾン層破壊関連の研究の草分けということで、

第1の専門である放射化学よりも、第2の専門ともい  
べき大気化学の方が本業と見られるようになった。1987  
年以降オゾン層保護への国際的取組みが進む中で、環境  
庁、通産省など行政への専門家としての助言を求められ  
ることが多く、中央環境審議会をはじめ審議会・委員会・  
検討会等々十指に余る委員を兼業する羽目になったが、  
地球環境保全は化学者としての社会的な義務でもあり、  
余人をもって代え難い役割には若干の時間と努力を割く  
のもやむを得ないと考えている。

このような協力のためか、1990年には環境庁長官から  
環境保全功労者として表彰された（この種の賞は理学部  
としてやや異色かと思うので報告しておく）。また、サッ  
チャー英首相やオランダのベアトリクス女王の東大訪問  
に際しては、本学の代表選手ということで松野太郎教授  
や茅陽一教授（工学部）とともに、地球環境研究につい

て一席お話しするという楽しい(?)経験もあった。

かえりみると40年というのは長いようで短く、まさに  
「夢まぼろしの如く」である。大学を去るにあたって特  
別な感慨はないが、最近嬉しかったのは、昨年5月私の  
還暦に際して開催したミニ国際シンポジウム「CHRT  
フォーラム」のために永年親交のある Choppin、  
Herber、Rowland 3 教授が夫人同伴で来日してくれた  
こと（因みに CHRT はこの3人と私の頭文字）と、昨  
年10月 Rowland 教授がオゾン層破壊に関する業績でノー  
ベル化学賞を受賞したことであった。

本郷で過ごした1956年から現在までを振り返って、思  
い出すままにとりとめのないことを書きならべたが、最  
後に、その間お世話になった多数の方々に厚く御礼申し  
上げるととも、理学系研究科・理学部の今後ますますの  
発展を祈りつつ筆をおく。



# 富永健先生、ありがとうございました

薬袋佳孝 (化学専攻)

富永健先生は、昭和52年より化学教室放射化学講座を担任、大学院重点化に伴い化学専攻無機・分析化学講座の所属となられた後も放射化学研究室を引き続き主宰され、本年停年を迎えられることとなりました。先生のご専門は放射化学・大気化学で、国内外で高く評価される業績を挙げて来られたのは広く知られる所です。また、これらの専門分野に留まることなく、無機化学・分析化学の広範な領域に研究を展開しておられます。この一方で、平成4年からアイソトープ総合センター長を務められるなど、本学の教育研究活動の推進に大きく貢献して来られました。学外においても、日本化学会副会長(平成6年より)等の要職を務められ、我が国の化学の発展に大きく寄与しておられます。国際交流にも大きな足跡を残され、放射化学分野に関する日米セミナーや第13回ホットアトム化学国際シンポジウムの開催、Radiochim. Acta 誌等の国際誌の編集を初めとして、広く活躍しておられます。また、Rowland 教授(カリフォルニア大学)を初めとする著名な化学者と個人的にも厚い親交を結ばれ、放射化学・大気化学とその関連分野の国際的な発展に大きく寄与しておられます。

このようにご活躍の先生に20年近くご指導を受けることが出来たのは、何とも有り難いことであったと思います。とはいえ、学生時代はもとより、職員として先生の前で研究を続けることとなりましてからも、先生には教えていただくことばかりの毎日でした。しかし、先生は、研究についても他のことについても、細かく指示される訳ではありません。むしろ、職員・学生の自主的な判断に委ねることが多かった様に思います。しかし、全くの放任という訳ではなく、要所を押さえた的確な助言を重要な所でいただいていた気が致します。これは、先生が、大局を見失うことなく、常に全体の方向性を考えておられるからと思われまふ。私も含めて研究の部分

的な所に目がとまりがちですが、先生は全体の位置付けに常に注意を払われており、的確に方向を修正されることがしばしばでした。もっとも私たち門下生には先生の意図が直ぐに理解出来ないことも多く、後になってお考えが判って来ることもしばしばでした。

先生は、研究の成果もさることながら、研究を進めて行くプロセスやその中に現れて来る職員・学生の人間としての個性に常に注意を払われて来た気が致します。研究室にはそれぞれに個性の強いメンバーが所属して来ましたが、その個性を生かしつつ、研究室としての集団の中での調和を取って来られました。これは、各人の個性を大切に、潜在的な能力を伸ばして行くことを重要と考えられてのことと思います。

研究室の外でのご活動については先生は余りお話しになりません。学会や会議などで他の先生からその辺のお話を伺うことがむしろ多かったように思います。これは研究室のメンバーに余計な気を使わせぬようにとのお気遣いであったと思います。

このように、先生は常に紳士であり、側に居る者に品位と風格を感じさせます。外国の著名な先生との会食に同席させていただいたことがありますが、先生の洒落な会話は様々な知識に裏付けられた多彩な話題に及び、なかなかついていけないこともしばしばでした。先生の品格は門下生の誰も届かない所ではありますが、その一部にでも近づくことが出来ます様、私共は努力して行かなければと思います。

門下生は、私を初めとして変な人間ばかりで、先生を悩ませ続けたのではと危惧しております。しかし、それぞれに、先生が示されて来た学問の道を新しい時代に向けて発展させて行くつもりです。

先生、本当に有り難うございました。





# 東大を去るにあたって

三津橋 務 (化学専攻)



近ごろ、いろいろな会に出ても、人の話を聞くのが苦手になった。最近の関心事から過去の出来事まで、様々な雑念が脈絡なく駆けめぐる。特に後者の比重が増しているのは、本郷やこの化学教室界隈の佇まいを、思い出と絡めて記憶に留めたいという力が働いているのかも知れない。

東大がどういうところか一度、見てみたいとはるばる旭川からやってきて、すぐに飛び出すつもりが、この歳までお世話になってしまった。汽車と連絡船に揺られて約30時間の道のりを、学生の頃、故郷が懐かしくて年に3度は往復していたが、便利になればなるほど距離感が狭まって望郷の念は薄れていった。

1957年、生物化学に惹かれていたこともあって化学科に進学した。当時、生物化学は化学科に属していた。それで、五月祭の時には生化のグループに加わったが、出し物はうさぎからATPを取り出して展示するというものであった。実際にATPを取り出す作業は助手の方がやってくれた。驚いたことに、鳴かない筈のうさぎが鳴きだしたのである。とても神経がもたないと悟り、生化行きは断念した。

大学院進学は有機化学の研究室に決めた。指導教官の島村修教授のご専門は有機反応の機構解析で、活気に満ちた大研究室であった。ところが修士課程に進学して間もなく先生が1年間、さらに直接指導を受けていた助手になりたての先輩が3年間、アメリカで研究されるという事態が発生した。要するに、私をコントロールする先生方が周囲に一人もいなくなってしまったわけである。勿論、手紙をやりとりして研究指導は受けていたが、国民学校以来の学生生活の中で、この時ほど楽しく開放感に満ちた時期はなかったと思う。これで勢いづいて2年で就職する予定を変更して、博士課程に進み、さらに助手になって研究を続けることになった。

大学紛争が落ち着いて、あと2年半で先生がご停年という時に博士研究員としてアメリカに留学した。1年目はゲインズビルという小さな市にあるフロリダ大学で、2年目はハーバード大学で研究することになった。どちらの生活も満足すべきものであったが、研究の結果次第

で思い出の質が変わってしまうことを身に染みて感じている。1年目は研究が思わぬ方向に発展して5つの報文に名を連ねることができた。風土の特徴と相まって当時のことは何から何まで輝いて見える。2年目は失敗の連続で、何等の結果も出せずに終わってしまった。業績もお人柄も申し分のない先生に付いていただけに、申し訳ないという思いは未だに続いている。

帰国して間もなく研究室は解散した。研究は教授一代限りというアメリカ方式がとられ、我々の帰属は宙に浮いてしまった。あとは私の流儀で「本来研究は個人的なもの」と割り切ってこつこつやってきた。お世話になった研究室には後輩の教官がいたが、それまでと全く変わらぬ態度で先輩として遇していただき、相談に乗っていただいた。これまで研究を続けられたのも、こうしたご支援の賜と深く感謝している。

昨年4月から化学新館5階の北側の部屋にいて、工学部から遙か向こうの建物まで一望におさめることができた。真下では新1号館の工事が始まっていたが、遅々として進まない様子なので、ここにいる間は眺望を楽しむことができると考えていた。ところが、一旦基礎工事が完了すと、あれよあれよという間に5階を通り越してしまった。今や、化学新館だけではなく、安田講堂までが小さな存在になってしまった。何か戸惑いを覚えなくてもいいが、完成後の景観が楽しみだ。

これまで、いろいろなところと共同研究して助けていただいた。心残りは他学科の先生方に相談に乗っていただく機会が一度もなかったことである。5階エレベーターを降りて左に曲がると化学の研究室が、右に曲がると物理の研究室が並んでいる。しかしながら、これまで一度も物理の領域に足を踏み入れたことはない。別に柵があるわけでもなく、見張りがいるわけでもないのに、心理的な壁は厚いようだ。何の予備知識ももたないで、よその領域にはいるわけにはいかないのである。時折、私が所属しているということで「理学部の某先生はご存じですか」と聞かれることがあるが、精々「お名前は存じておりますが、お仕事の方はよくわかりません」といえる程度で、自分の不勉強を見透かされているような気がしてばつが悪い。先生方の研究の概要がわかり、気軽に情報交換できるシステムがあれば、いろいろな面で利用できるのではないかと常々考えていた。いずれ、ホームページが浸透して、何時でも都合のよい時に仕事の内容や研究上の接点についての的確な情報を得ることができる、そういう時代が来るのだろうと思う。

長い間お世話になりました。理学系研究科のご発展を心からお祈り申し上げます。

## 三津橋 務先生を送る

岡崎 廉治 (化学専攻)

三津橋先生に初めてお逢いしたのはもう30数年も前のことですが、とてもそんな時間が経ったような気がしません。私が卒業研究のために入った島村研究室の2年先輩でした。当時は島村教授がアメリカに一年程出かけておられたときで、研究室ではスタッフ、学生とものびのびと(決してのんびりとではありませんでしたが)研究をしていました。その頃三津橋先生はトリアゼンという窒素を含む有機化合物の研究をしていました。私が研究室に入って二年位経った頃だったと思いますが、三津橋先生の書いた論文( $^{15}\text{N}$ を用いた反応機構の決定に関するものであったと記憶しています)が新しい優れた論文を紹介する Chemistry and Industry (この雑誌は今ではもうあまり読まれていませんが、当時は多くの優れた速報を掲載していました)という雑誌のハイライト欄で紹介されました。今でこそこの種のハイライト欄をもつ雑誌もかなり増えていますが、当時有機化学の分野ではこの雑誌位しかなかったと思います。その三津橋先生の論文が輝いて見え、そのような論文を自分も是非書いてみたいものだと思ったことをよく覚えています。考えてみますと三津橋先生のその後の研究の底流にこのトリアゼンの研究がいつも存在していたように思います。

博士課程を修了してからも引続いて島村研究室に残りましたが、島村先生の退官後は他の研究室に移り、その後は、いろいろな研究者と共同研究をしながらも、ほとんど一人で研究してこられたと思います。トリアゼンの研究はその後、炭素—炭素結合の開裂で三級カルボカチオンを発生するという新しい反応の発見および有機化学反応における溶媒効果のユニークな評価法の開発へと発展しました。また、最近 twin 型電子受容体の合成を中心とした有機機能性物質の研究にも興味をもっておられ、物理化学の分野の研究者との共同研究もしておられます。

三津橋先生はその飾らぬお人柄ゆえ学生からも厚い信頼を受けています。必ずしも恵まれた研究環境になかったと思うのですが、そのような状況でも着実に優れた研究を続けられたのはそのお人柄からくる達観した、良い意味での個人主義があったからではないかと勝手に想像しています。

退官後も私立大学で教鞭を執られるとうかがっております。今後もどうぞ健康にご留意のうえ活躍されますことを心からお祈り申し上げます。



# 思い出すこと

鵜澤 淑子 (地球惑星物理学)



私が地球物理学教室の図書室に勤務することになったのは昭和34年の秋でしたが、以来一度も弥生の地を離れずに定年を迎えることになりました。

当時の教室は緑に囲まれた木造二階建と平家の各一棟で今の大型計算センターのあたりにあり、田舎の分教場を思わせる簡素な建物でしたが中に住んでいる方々はみんな輝いていて元気で暖かい雰囲気を持っておられました。

図書室は二階建の方の一室にあり資料に埋れている状況でまもなく3号館の2階に移りました。初めは何をして良いかわからず不安でしたが徐々に慣れて何とか仕事ができるようになりました。しかし今のように図書室間の横のつながりもなく心細い思いをいたしました。やがて教室の職員の方々とも友達になることができました。当時は昼休みにフランス語の勉強をしたり(講師は高野健三先生)、歴史の勉強をしたりして充実した楽しい時を過ごしました。

先生もそれぞれに魅力のある方が多く地震学の松澤武雄先生は温顔で慈愛に満ちた方でした。後任で東北大学から転任して来られた本多弘吉先生もたいへんお優しい方でいつもほほえみを浮かべて接してくださいました。

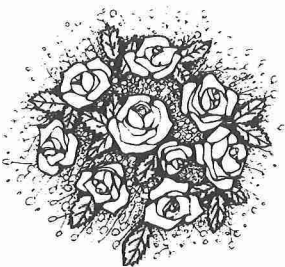
ある年の宵には先生と職員で雛祭りをしたこともありました。

永田武先生は元気で気さくな方で時々お好み焼の会を所望され、会費は先生のポケットマネー、職員はお手伝いのご相伴というわけでした。よほど好きだったらしく外国から催促の手紙が来たと事務室の方は苦笑しながらも嬉しそうでした。

この他に威厳に満ちた坪井忠二先生、日高孝次先生、正野重方先生もおられ活気に溢れた時代でした。無知な者にとっては優しい先生あるいは近寄りやすい存在などとしか見えなかった方々が後になって考えるとそれぞれに世界的な学者なのでした。若い研究者も個性的な方が多くやや浮世離れの感もありましたが研究に専心している様子がうかがえました。この方々も立派な業績をあげられ、後に地球物理学研究の重鎮となられ世界に羽ばたいて行かれた方も多くおられます。過ぎ去った日々はみななつかしく楽しい思い出となりました。

そうこうするうちに図書室はまた資料の増加のために4階に移ることになりましたが、ここで最初に見たのは学内紛争による安田講堂の攻防戦でした。窓を開けて見ていると催涙ガスで目が痛かったことを思い出します。この図書室が現在のものですが、今見えるものは建設中の新1号館で安田講堂はすでに隠れて見えません。

この間図書館界も機械化が進み便利になりましたが仕事の面では忙しくなりました。こんな中でいたらぬ私を暖かく見守ってくださり、困った時にはいつも気持よく助けてくださった教室の方々に深く感謝いたします。また、大勢の理学部の職員の方々、ことに図書職員の皆様にはたいへんお世話になりました。心からお礼を申しあげたいと思います。長い間ありがとうございました。



# 鵜沢淑子さんのこと

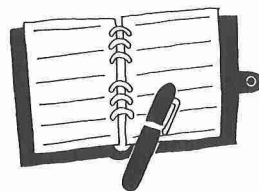
浜野洋三 (地球惑星物理学専攻)

鵜沢さんが地球物理学教室の図書に來られてから何年が過ぎたかは、実は私には実感がありません。私が初めて鵜沢さんにお会いしたのは地球物理学科に進学した昭和40年ごろではないかと思います。当時、地球物理の図書室は理学部3号館の2階にありました。その頃3号館はまだ建てられたばかりで新しかったはずなのですが、2階は廊下が狭くて、汚くて、暗かった印象があり、30年経った今と全く変わっていない感じです。今も時々起こる水漏れもありました。これは本当はそんなはずがないので、2階の南側には教授の先生方の居室が並んでいて、今と違って扉がすべて閉められていたために、そういう印象があるだけかもしれません。とにかく図書室は、この廊下の真ん中あたりに教授室の向かいで、たしか海洋の水槽実験室のとなりがありました。狭いところに地震学教室以来の本がぎっしりと詰まっていて、閲覧室が狭く、コピー機（ゼロックスではなくリコーの青焼の機械）も書庫のいちばん奥においてありました。鵜沢さんの居場所もなかった様な状況であったと思います。その後、3号館が増築されて、図書は4階に移りました。この時もあれだけの本を移動した後で整理するのに、鵜沢さんは苦労されたと思いますが、私共は当時学生で、たしか、図書室にあった机や書棚をわれわれの地下の実験室にもらうことばかりを考えていて、ほとんど手伝った記憶はありません。本当に図書は利用するばかりで、鵜沢さん申し訳ありません。

さて、鵜沢さんには長年に渡ってお世話になりました。お世話になったことはいろいろありますが、図書室と図書の運営に関して、微妙なバランスを長年に渡って維持していただき、大変使いやすい図書室にさせていただいたことが一番であると思います。この点は、実は学科の図書室に対する、私の自分勝手にせいたくな考えであり、最近の図書の風潮にはそぐわないのですが、こういう機会に述べさせていただきます。図書室に必要とされるこ

とは、いつでもたとえ深夜でも見たいときに見たい本がすぐに見られることです。これは図書室に深夜の午前2時ごろにもすぐに入ることができることがもちろん必要ですが、実はそれだけではだめで、見たい本が盗まれていたり、紛失したり、期限を過ぎても誰かが借り出したままにしていることはできないことです。図書室に誰でも自由にいつでも入れる状況で、かつ図書の管理が厳密に行なわれることが是非必要です。これはかなり人ごとのような言い草ですが、一方利用者からすると本を借りるとその本が自分の本のつもりで、いつも自分のそばに置いておきたくなります。特に自由にコピーがとれないころには、一層そうでした。私も結構本を借り出すほうでして、いまだに一人何冊という制限も知らないで済ませていて、鵜沢さんからもらう期限切れ図書の請求のリストには30冊ぐらいの本が並んでいました。地下にすんでいたころには鵜沢さんが4階から降りて、催促にこられたことも何回もあります。それでいながら、見たい本がないときには鵜沢さんにすぐ見たいとせつついていました。鵜沢さんに色々といあわせていただいてその日のうちには大抵手に入れていました。最終的に本が見つからなかったことは一度もなかったと記憶しています。このように地球物理の図書室は、利用者にとっては、大変使いやすい便利な図書室であったと思います。これは、われわれのような自分勝手な利用者が多い状況（少なくとも私のようなのが10人程度はいました）を考えると、図書室を維持するための、鵜沢さんの努力は並大抵のものではなかったと思います。本当にご苦労様です。

かなりかつてなことをかきました。鵜沢さん、本当に長い間、私を含めて自分勝手な利用者の面倒をよく見ていただき、かつ図書の管理をよくやっていただいて、使いやすい地球物理の図書室を実現していただき、ほんとうに有り難うございました。



# 植物園での3年

矢内 敏明 (植物園)



3年前カタクリの咲く4月に生産技術研究所から植物園に着任し、緑豊かな自然に近い恵まれた環境の地で勤務させていただき、あれよあれよと言う間に時は経過し、来たるべきして来た定年を残すところ1ヶ月で迎えることになりました。

植物園での3年間と言う短い期間ではございましたが、その間に研究温室改築、園内環境整備ならびに分園の便所改築等の完成を見ましたことは、理学部・事務局の関係された方々のご尽力のおかげであると改めて御礼申し上げます。

私は、昭和41年1月宇宙航空研究所に採用され、以来農学部・工学部・生産技術研究所に勤務させていただきました。これもひとえにそれぞれの部局でお世話になった先輩・同僚の方々の暖かいご指導・ご支援の賜ものと深く感謝いたしております。

去るにあたりまして、お世話になりました理学部・植物園の皆様のご健勝と益々のご発展をお祈り申し上げます。

## 矢内敏明事務主任を送るにあたって

村上 哲明、平原 茂子 (植物園)

矢内敏明事務主任は東京大学に29年7カ月間在職され、そのうち、平成5年4月から平成7年3月まで事務主任として植物園で事務管理等にあたられました。植物園に在職された3年間だけでは、とても矢内事務主任のことを言い尽くすことはできないと思いますが、私たちの矢内事務主任にまつわる思い出を述べさせていただきます。

一つ目は、研究温室改築に関わる思い出です。矢内事務主任は、ちょうどその改築期間中に着任されました。そこで工事の後半を前主任より引き継がれ、着任早々、関係各機関との折衝や連絡に忙しくあたられました。新しい研究温室は、研究部と育成部の教官・技官が長らく待ち望んでいてやっと実現したものです。研究温室が徐々にできあがっていく様子、形として現れた建物に寄せる期待を全ての職員より一心に受けとめられていらしたように思いました。

二つ目は、矢内事務主任の着任の翌年に植物園の環境整備が行われたことでした。道路改修、池改修、休憩所新設、藤棚新設、案内板設置、標識版設置など大規模な整備事業が行われました。約16万平方メートルという広大な植物園ですから、園内の環境整備が約3カ月の短期間で行われたことは、これまでに例をみななかったと思います。そのため、教職員や工事現場関係者との折衝を行うだけでも大変な仕事です。しかし、それだけではありません。植物園は、東京大学の教育実習施設であること

はもとより、小・中学校の学習の場でもあり、また一般入園者の憩いの場ともなっています。植物園の重要な使命の一つである一般公開業務の遂行とこのような大きな工事を両立させるために、入園者に対する気配りやご心労が特に多かったように思われました。年間約20万人の入園者でにぎわう植物園ですから、閉園をしないでこのような整備事業を無事に遂行できたのは、矢内事務主任の気配りに負うところが大きいと思います。

植物園にとっていずれも歴史的な大事業であった研究温室の竣工と環境整備による植物園内の各整備が矢内事務主任の3年間の在職期間中に行われたということは特筆すべきことです。これらを見事成し遂げられた矢内事務主任のことは、深く教職員の心に刻まれることになったと思います。以上のような大事業以外でも、たとえば、教官がつくった科研費などの書類に誤りがないか（大抵たくさん誤りがあるのですが…）いつもていねいにみて下さいましたし、台風や大雪など非常事態が発生した時は、常に真っ先に駆けつけて、適切な処置をして下さいました。高橋事務官が倒れたときに最も献身的に働かれたのも矢内事務主任でした。矢内事務主任のあたたかい気配りには、植物園の教職員一同、いつも感謝していました。これからは健康に留意され、ますますのご活躍を期待しております。



# 私と植物園 — 想いでふたつ

伊藤 義治 (植物園)



昭和31年10月に植物園に籍をおいてから、すでに40年目を迎えたこととなりますが、振り返ってみると色々なことが目に浮かんできます。勤務当初の植物園はいまだ戦後の状態で、台地の中ほどから奥の部分は草ぼうぼうで、草刈りなどの作業を中心にやっていたおじさん達によって、冬になってやっと枯れ草刈りが一巡する有様でした。さらに一番奥に位置する針葉樹林は根株だけがやけに多く残っていたが、当時の話では、これらは戦後付近住民が夜な夜な燃料に切り倒した跡とのこと、日当たりがよくなったその辺は雑草が2 m以上にものびていたものです。

昭和30年度から系統保存事業により、内外から植物の種子交換がはじまり、56年の記録によると10,000余種の収集があり、種子をまいた鉢が所狭しと育成場に広がっていたものです。これらの資料を苗床でさらに育成しようとのことから私の出番になり、初期の職務と異なり、植物との深い繋がりになるきっかけになったとおもわれます。

戦後10余年荒れるにまかせていた場所(約350m<sup>2</sup>)の雑木を切り倒し、伐根は手仕事で行い、某大学から耕耘機を借用してやっと苗床に仕上げ、稚苗を植えたものです。ところが目にする植物は名前すらまったく知らない

外国産が多く、自生地、栽培環境などについても同様で、それらを知るよすがとなったものは図書室の書籍であり、難しい洋書をひもとくきっかけとなったのはもちろんです。また、当時の園長(故前川文夫教授)は、1週間に一度勉強会と称して昼休みに話題の植物について Botanical Magazine などの洋書の解説をしてくださったり、古沢潔夫助教授からはさらに細部にわたる助言をいただいたものです。さらに学生の野外実習に自費参加させていただいたことなど、自己形成に大変役立ったと感謝しています。

収集された膨大な植物資料を如何に役立てるか、園内でどのように活かせるものか、論議の対象になったものです。初めの頃は管理が行き届かないことと、いたずらなどによって植えては枯れるの繰り返しであったようです。昭和54年(古谷雅樹園長)に園内の植生についての検討が始まり、昭和59年7月に示された「植物園における植生配置の現状と将来計画に関する報告」にその概要が示されたものです。それを受けて、平成元年3月に植物園専門委員会による「植生配置実行計画」が示されてから、やっと本格的に実行に移すことになったわけですが、年間わずかな予算を捻出していただき、育成部(技官)職員による手作りで行い、すでに7年を経過したが、全体の構想からみるとほんの一部の手直しにとどまり今日に至っています。この事業は人生後半に託そうとしたものですが、計画のために約10年の期間を費やしたことは、私にとっては返すがえすも残念に思われます。しかし、植物園スタッフによって、今後さらに優れた植生改良事業が遂行されることを期待しております。

最後になりましたが、40年にわたる間大過なく勤務できたのも、ひとえに学部の沢山の方々のご指導、ご鞭撻をいただいたお陰と深く感謝し、御礼申し上げてお別れのご挨拶と致します。



# 伊藤さんを送る

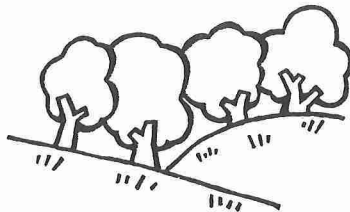
下園文雄(植物園)

伊藤さんは昭和31年に植物園に奉職され、40年間、一貫して樹木の収集と育成管理に勤めてこられました。伊藤さんが就職された当時の植物園は、戦後の復興も遅々として進まない荒れ果てた状態でした。まず、伊藤さんが手掛けられたのは、切り倒された樹木の根を掘り起こす作業など園内整備であったそうです。諸外国の植物園との種子交換や植物採集・野外調査などで集めた種子や苗木を育て、整備された園内にコツコツと植えこんでこられました。それゆえ、伊藤さんは園内の隅々まで熟知していて、どの植物が園内のどの場所に植栽してあるか、全部承知しておられました。我々では、植物は知っていても、その種類が植物園のどの場所に植栽されているかまでは、すぐには思い浮かびません。これまでは、伊藤さんに聞けば良かったものが、今後は、植生図と首っぴきであらなければならなくなります。伊藤さんが余人を持って変えがたい人であったことがよくわかります。

昭和59年、東大植物園の将来計画が発表され、それに伴い園内の植生配置検討委員会が設けられました。その中であって、伊藤さんは精力的に資料作りを行い、植物園の将来100年を見越した植生配置計画および植生配置改良実行計画を作りあげられました。そして、それに基づいて、これまで収集してきた植物を園内に植えこんで来られました。しかし、植物園は予算も少なく人手もなく、植え込み時期に追われながらの植生改良事業は、遅々として進まず、伊藤さんにしてみれば歯痒い思いをされたことでしょう。今後の植生改良事業の行方も気掛かりのことと思います。今後は、我々が植生配置改良実行計画に基づき、後を引き継いでいきたいと思っておりますので、退職後もご指導のほどよろしくお願い致します。

植物園の長い歴史の中で大きな災害や変遷によって荒らされた時期が三回ありました。はじめは御薬園から植物園に変わる時、次は大正12年の関東大震災、昭和の太平洋戦争であります。その時、復興の現場で尽力された人たちは、植物園の歴史上に生きています。明治時代が内山富治郎氏であり、震災後が松崎直江氏でありました。戦後は混乱期が長くいろいろな人たちが復興に向けて努力されてきましたが、一貫して園内の植生改良に取り組んでこられた伊藤義治さんと云うことができます。

伊藤さんには多くの業績がありますが、なかでも、植物園に隔離保存されていたニュートンのリンゴの木(この木は、ニュートンが万有引力の法則を発見するきっかけになったものの枝を接ぎ木した苗木をイギリスより譲り受けたのですが、ウィルスに感染していた)の無毒化に成功されたことは有名です。伊藤さんがウィルスを除去して下さったお陰で、園内に植え出して入園者に見てもらえるようになりました。また、その苗木が全国の100箇所以上の施設や学校にも配布されています。伊藤さんは、ツツジに魅せられ、自ら、日本全国の山々を廻り、また、外国から種子を取り寄せ、ツツジの種類をたくさん集めてこられました。3年前、植生配置計画に基づき、植物園のほぼ中央にツツジ園が作られ、春3月～5月には見事な花を咲かせて入園者の人気を集めています。伊藤さんは多くの業績を残され、植物園にとって無くてはならない方でありましたが、第2の人生を千葉県緑の相談所で活躍されることが決まっております。今後も時々植物園に来て叱咤激励のほど宜しくお願い致します。お体に気を付けてご活躍して下さい。永い間、誠に有り難うございました。



# 理学系研究科長（理学部長）と理学部職員組合との交渉

1994年3月25日、4月18日、5月30日、6月27日、7月25日、9月22日、10月17日、11月21日、12月20日、1995年1月24日、2月20日、3月22日に、小林研究科長・三浦事務長と理学部職員組合（理職）との、同4月17日、5月22日、6月19日、7月17日、9月18日、10月30日、11月20日、12月18日、1996年1月22日、2月27日に、益田研究科長・柚原事務長と理職との定例研究科長交渉が行なわれた。主な内容は以下の通りである。

## 1. 職員の昇級・昇格について

### 〈事務職員〉

理職は、93年5月に昇格基準を満たした物理事務室主任1名の4級昇格を93年7月に取り上げて以来引き続いて要求し、94年4月1日付で4級昇格が実現した。また94年3月の交渉で理職が要求した地学科事務室主任の生物化学科事務主任昇任も同年4月1日付で実現した。これらの昇任昇格実現に理職は理学部の努力を多とした。さらに理職は在級年数以外の基準を満たしている化学科事務主任の5級昇格を要望し（94年5月）、同年4月1日付で実現した。この問題に関して理職は、文部省の5級昇格基準が50才以上の者は在級10年（50才未満の者は在級7年）となっているのは納得できないとして、少なくとも50才以上の者には事務主任昇任と5級昇格を同時発令すべきだと主張、改善を要求した（94年5月）。4級在級期間が長く94年度に55才で5級昇格した生物学科事務主任（95年4月より生物科学科）の6級昇格についても、95年の昇級延伸前の実現を要求した（94年10、11月）。

理職は94年3月以来ほぼ毎回の交渉において、教室系事務職員の5級昇格改善の方策として、全専攻に掛長（事務主任）ポストをつけること及び専門職員の学科、教室事務への導入を要望書の提出を含め一貫して要求し続けた。特に95年12月には、文部省が人事院に学科、教室事務の専門職員新設を96年度の要求事項としてあげていることを示し、この問題についての積極的な取り組みを要望した。研究科長は現状のままでのポスト増という理職の要求に理解を示した（96年2月）。

### 〈技術職員〉

理職は94年度の教室系技術職員の6級昇格に関し、実現1名というのは他部局に比べて悪いことを指摘し、理学部の見解を問うた（94年12月）。事務長は年令順で要求したことを明らかにし、号棒・年令順の昇格が妥当だという考えであると述べた（94年12月）。理職は飛び越し昇格問題の解消を訴えるとともに、技術官の業績を明らかにするために、教官の論文に研究協力者として名前を加えてもらうよう働きかけることを要望した（95年6月）。研究科長は技術官が関与した研究については謝辞または論文の共著者として載せるよう教授会で要請したと述べた（95年7月）。95年12月、高位号俸者3名の6

級昇格が実現し、ある程度の改善を見たことに理職は理学部の努力を多とした。理職は、93年（平成5年）より放置されてきた技術部組織の技術長をはじめ班長、主任の空きポストを全て埋めて組織の再編成を早急に行なうことを要望した（95年12月）。事務長は技術委員会の承認を得て行なうつもりだと答え（95年12月）、2月28日に技術委員会を開いて検討すると述べた（96年2月）。

### 〈図書職員〉

理職は、図書職員の処遇が劣悪であることを訴え（94年6、9月）、職務の専門性を重視した処遇改善を要求した（95年6、12月、96年1月）。事務長は職員を組織化して主任、掛長、専門職員定数を要求したいと述べた（95年10月）。理職は、理学部図書館の建設が成った段階で組織化を行うべきだというのが理学部図書職員の総意であると述べた（96年2月）。

### 〈行（二）用務員の3級昇格〉

理職は、行（二）用務員の3級昇格実現を94年11月以降ほぼ毎回の交渉で訴えた。事務長は職務内容に付加業務を加えて上申したと述べ（95年3月）、努力していると答えた（95年9月）。

## 2. 技術職員の助手振替問題

教養学部には貸していた定数が漸次助手定数として理学部に返還され、それに技術職員定数を振替えていることについて、理職は技術職員定数の削減に結びつくため中止を要求した（95年3、11月）。事務長は、それは無理だが振替後に退職した助手定数は継続的に技術官業務の助手として使うことを明文化すると約束した（95年11月）。

## 3. 中途採用者不利益解消

理職は、民間からの異動のため処遇面で著しい不利益を被っている技術職員の不利益解消について、研究科長に対し総長裁定による昇格を求める要望書を総長宛に出すことを要求した（94年6月）。研究科長は10月に要望書を渡したことを明らかにした（94年11月）が、任期中に成果のなかったことに遺憾の意を表した（95年3月）。理職は当該職員が在級年数を満たしてしまう96年4月以前の4級昇格を毎回の交渉で要求し、研究科長も努力すると回答した。

## 4. 行(二)から行(一)への振替について

理職は、行(一)の業務を行なっていないながら行(二)に据え置かれている職員について、行(一)への早急な振替を要求してきた。事務長は、84年以前採用者の振替問題が解決すれば進展するのではないかとの見通しを述べた（94年4月）。理職は要望書を提出し、年度中の振替を強く要望した（94年6月）。95年4月、85年以降採用者の振替が1名実現したことから、理職は問題解決に有利な事実と捉え、早期実現を毎回の交渉で訴えた。これに対し研究

科長は、人事課に働きかける等努力していると回答した。

## 5. 生物化学科の職員補充問題

94年4月以降の理学部における中途退職者2名の定数がいづれも生物化学科に補充されなかったことについて、理職は強い不満を表明し、全力を尽くして早期解決することを要望した(94年6月)。これを受けて研究科長は、人事委員会と教授会で生物化学科に定員1名が補充されることが了承されたと述べ(94年9月)、95年4月1日付で1名の事務職員が生物化学科に配属された。

## 6. 教室系技術職員の専行職移行問題について

理職は専行職移行実現を目指し、9大学理学部長宛に早期実現を要請する文書を送付したことを伝えた(94年5月)。研究科長は9大学理学部長会議の席で東大に同調してほしい旨訴えたと述べた(94年5月)。理職は国大協からの専行職移行問題に関するアンケートの回答に理職の意見を反映させるよう要望し(94年7月)、研究科長は要求を入れた回答をした旨述べた(94年9月)。理職は研究科長に全員移行、専行職4級定数の多数確保、柏キャンパスを想定した定数の確保、の3点を提言した「技術職員の専行職移行に関する理学部職員組合の提言」を提出した(95年9月)。研究科長は同提言に同感の意を示した(95年9月)。理職は、上位級定数を多く取るため専行職移行前に6級在級者を技術長、5級在級者を班長、4級在級者を主任に昇格させることを求める要望書を提出した(95年12月)。事務長は理学部技術委員会に諮って決めると答えた(95年12月)。

## 7. 職員の所属及び身分証明書について

93年度に実現しなかった職員の理学系研究科移行について、研究科長は94年度、95年度と概算要求すると述べた(94年4月、95年1月)。95年4月1日付で職員の所属が理学部・理学系研究科になったという辞令が総長名で交付されたが、事務長はこれは運用で行なわれたと説明した(95年4月)。95年5月末に配られた職員の身分証明書の所属は学部になっていたため、理職は辞令に一致させるよう要求し(95年6月)、96年2月、辞令と一致した身分証明書が再交付された。

## 8. 定員削減問題

理職は、削減による職員の減少を非常勤職員で補おうとする発想は過去における大規模な定員外職員の定員化問題が繰り返されることが予測され、大学職員全体の賃金を低く抑えられる事態につながる危険性をはらむことを指摘した(94年9、10月)。理職は、機会をとらえて定員削減問題について訴えること及び削減を退け必要人員の確保へ取り組むことを求めた(94年11、12月、95年1月)。研究科長は定員増は大学問題における最も大きな合意事項であるはずだと答えた(95年12月)。理職は、昭和40年の第1次定員削減より第8次までの30年間で技術職員定数は半分に減っていることを指摘、第8次定員

削減に対する理学部の方針を質した(95年7月)。研究科長は定年退職者を定削にあてる方針であると答えた(95年7月)。理職は96年度は定年退職者だけでは削減割当をこなせない深刻な事態であり、教授会は真剣に対応策を考えるべきだと訴え、研究科長は理学部の方針に関して検討することを約束した(95年7月)。

## 9. 教員の任期制導入について

理職は、95年9月18日に文部省大学審議会が出した中間報告「組織運営部会における審議の概要—大学教員の任期制について—」に対し、教員への任期制導入に反対を表明するとともに、理学部の見解を質した(95年12月、96年2月)。研究科長は学部として議論はまだ行っていないと答えた(96年2月)。

## 10. 新1号館建設問題

理職は新1号館建設後の十分な書記局スペースの確保を要求し(95年7、10月)、研究科長は現在の2倍程度の面積で2部屋分を確保すると約束した(95年10月)。

理職は新1号館建設にともなう理学部図書館建設計画について、建物、組織の検討はどこで行なわれるのかを尋ねた(94年7月)。研究科長は図書委員会の下部組織である理学部図書館設立準備委員会(平成4年発足決定)をスタートさせそこで検討すると回答した(94年7月)が、後に図書委員会が適当であると述べた(94年11月)。理職は図書館設立には職員の組織機構が必要でありそれは概算要求事項であることを指摘し(94年11月)、処遇改善に結びつく職員組織編成を要望した(94年10、11月)。研究科長は努力すると答えた(94年10月)。

## 11. 柏キャンパス計画について

94年3月からほぼ毎回の交渉で、理職は柏キャンパス計画について質すとともに、柏に本郷から職員を充てることと安易なパート、ボランティア導入には反対であると主張した(95年3月)。研究科長は本郷の人員を減らすことには反対を表明していると述べた(95年3月)。

## 12. 地震、災害対策について

理職は、阪神大震災を契機に理学部の災害対策を早急に整備するようを要求した(95年2月)。研究科長は整備を始めていると答えた(95年2月)。

## 13. 組合活動における慣習尊重について

95年7月7日、理職の恒例行事である1号館前の七夕飾りを事務当局が撤去したことに対し、理職は強く講義するとともに、組合活動における慣習を尊重すること及び問題が生じた場合は必ず交渉の場で話合うことを求めた(95年7、9月)。研究科長はこれを承認した(95年7、9月)。

# 人事異動報告

(講師以上)

所 属	官 職	氏 名	発令年月日	異動内容	備 考
地球惑星	助教授	和 方 吉 信	7.4.1	採 用	東海大助教授より
植 物	〃	高 橋 正 征	〃	昇 任	教養学部教授へ
生物科学	教 授	加 藤 雅 啓	〃	〃	植物園助教授より
〃	〃	雨 宮 昭 南	〃	〃	臨海助教授より
〃	〃	田 嶋 文 生	〃	〃	遺伝学研究所助教授より
〃	助教授	真行寺 千佳子	〃	〃	動物助手より
臨 海	〃	岡 良 雄	〃	〃	動物助手より
物 理	教 授	十 倉 好 紀	〃	配 置 換	工学部教授へ
〃	〃	柳 田 勉	〃	〃	東北大教授より
化 学	〃	中 村 栄 一	〃	〃	東工大教授より
地球惑星	助教授	栗 田 敬	〃	転 任	筑波大助教授より
生物科学	教 授	新 井 良 一	〃	〃	科博研究室長より
〃	助教授	野 崎 久 義	〃	〃	環境庁環境研主任研究官より
鉱 物	〃	村 上 隆	〃	〃	愛媛大助教授より
地 理	〃	茅 根 創	〃	〃	通産省地質調査所主任研究官より
物 理	〃	酒 井 英 行	7.4.16	昇 任	助教授より
〃	〃	牧 島 一 夫	〃	〃	〃
天 文	助教授	尾 中 敬	〃	〃	助手より
生物化学	講 師	名 川 文 清	〃	〃	岡崎国立共同研究機構助手より
情報科学 (流動講座)	助教授	中 島 浩	7.4.1	併 任	本務：京都大学
( 〃 )	教 授	宮 本 昌 典	〃	〃	本務：国立天文台
( 〃 )	〃	安 藤 裕 康	〃	〃	〃
( 〃 )	〃	鱸 目 信 三	〃	〃	〃
( 〃 )	〃	井 上 充	〃	〃	〃
( 〃 )	助教授	柴 田 一 成	〃	〃	〃
地球惑星 ( 〃 )	〃	山 本 達 人	〃	〃	本務：宇宙科学研究所
生物科学 ( 〃 )	教 授	大日方 昂	〃	〃	本務：千葉大学
( 〃 )	〃	杉 浦 昌 弘	〃	〃	本務：名古屋大学
( 〃 )	〃	武 田 正 倫	〃	連携併任	本務：国立科学博物館
( 〃 )	〃	柏 谷 博 之	〃	〃	〃
( 〃 )	〃	馬 場 悠 男	〃	〃	〃
( 〃 )	助教授	松 浦 啓 一	〃	〃	〃
( 〃 )	〃	樋 口 正 信	〃	〃	〃
( 〃 )	〃	加 瀬 友 喜	〃	〃	〃



所 属	官 職	氏 名	発令年月日	異動内容	備 考
鈹物 (流動講座)	教授	大 隅 一 政	7.4.1	併 任	本務：高エネルギー物理学研究所
( 〃 )	〃	福 田 正 己	〃	〃	本務：北海道大学
生物科学	客 員 教授	鈴 木 隆 雄	〃	〃	本務：都老人研究所
〃	客 助教授	西 田 治 文	〃	〃	本務：国際武道大
中 間 子	〃	瀧 川 仁	〃	〃	本務：IBM T・J ワトソンリサーチセンター
情報科学 (学際理学)	教授	小 山 照 夫	〃	〃	本務：学術情報センター
( 〃 )	助教授	満 田 和 久	〃	〃	本務：宇宙科学研究所
( 〃 )	教授	小川原 嘉 明	〃	〃	〃
( 〃 )	〃	長 瀬 文 昭	〃	〃	〃
( 〃 )	〃	河 島 信 樹	〃	〃	〃
( 〃 )	〃	横 谷 馨	〃	〃	本務：高エネルギー物理学研究所
天 文	〃	井 上 一	〃	〃	本務：宇宙科学研究所
( 〃 )	〃	奥 田 治 之	〃	〃	〃
( 〃 )	〃	鶴 田 浩 一 郎	〃	〃	〃
地球惑星	〃	水 谷 仁	〃	〃	〃
( 〃 )	〃	西 田 篤 弘	〃	〃	〃
( 〃 )	〃	向 井 利 典	〃	〃	〃
( 〃 )	〃	市 川 行 和	〃	〃	〃
化 学	〃	柳 下 明	〃	〃	本務：高エネルギー物理学研究所
( 〃 )	助教授	藤 原 顕	〃	〃	本務：宇宙科学研究所
鈹物 (流動講座)	教授	青 本 和 彦	7.5.1	〃	本務：名古屋大学
( 〃 )	〃	河 村 雄 行	〃	〃	本務：東京工業大学
物 理	〃	大 谷 弘 之	〃	〃	〃
( 〃 )	〃	大 谷 弘 之	〃	〃	〃
植 物 園	助教授	邑 田 仁	7.6.1	〃	講師より
地 殻	〃	金 沢 敏 彦	〃	〃	地震研教授へ
植 物 園	助教授	邑 田 仁	7.6.30	辞 職	都立大教授へ
情 報	教授	辻 井 潤 一	7.7.1	採 用	
化 学	助教授	井 本 英 夫	7.7.16	昇 任	講師より
地 殻	教授	野 津 憲 治	7.8.1	〃	助教授より
生物科学	教授	木 村 賛	7.10.1	配 置 換	京都大教授より
〃	〃	近 藤 矩 朗	〃	転 任	環境庁国立環境研総合研究官より
物 理	助教授	相 原 博 昭	〃	採 用	UCLA ローレンスバークレー研助教授より
生物科学	〃	西 田 生 郎	〃	昇 任	岡崎国立共同研究機構助手より
〃	講 師	上 島 励	〃	〃	筑波大助手より
情 報	教授	平 木 敬	7.10.16	〃	助教授より
植 物 園	〃	福 田 裕 穂	7.10.16	配 置 換	東北大教授より

所 属	官 職	氏 名	発令年月日	異動内容	備 考
生物科学 (共通流動講座)	教 授	藤 島 正 博	7.10.1	併 任	本務：山口大教授
( 〃 )	〃	重 井 陸 夫	〃	〃	本務：京都工芸繊維大教授
( 〃 )	〃	日 詰 雅 博	〃	〃	本務：愛媛大教授
( 〃 )	助教授	山 根 正 氣	〃	〃	本務：鹿児島大助教授
中 間 子	併 任 教 授	橋 本 治	7.11.1	転 任	東北大より
地 殻	助教授	五十嵐 丈 二	〃	〃	広島大助教授より
情 報	教 授	萩 谷 昌 己	7.11.16	昇 任	助教授より
生物化学	〃	深 田 吉 孝	7.11.16	〃	教養学部助教授より
生物科学	助教授	藤 原 晴 彦	7.12.16	〃	講師より
地殻化学	〃	中 井 俊 一	〃	〃	助手より
化 学	講 師	澤 村 正 也	8.2.16	〃	〃

## (職 員)

所 属	官 職	氏 名	発令年月日	異動内容	備 考
事 務 部	事 務 長	柚 原 義 久	7.4.1	転 任	静岡大学庶務部庶務課長より
〃	専門職員	山 田 喜 朗	〃	配 置 換	海洋研究所総務課庶務掛長より
〃	庶務掛長	奥 抜 義 弘	〃	転 任	統計数理研究所管理部庶務課人事係長より
〃	図書掛長	小 山 修 美	〃	配 置 換	附属図書館情報管理課図書受入掛長より
〃	教務掛長	宇都宮 栄 次	〃	昇 任	教養学部・数理化学研究科教務課前期課程第一総務主任より
〃	司計掛長	柳 澤 知治郎	〃	配 置 換	工学部経理課経理掛長より
物 理	事務主任	小石沢 昭 子	〃	〃	教育学部用度掛長より
生物科学	事務室主任	津 田 敦 子	〃	昇 任	教養学部・数理化学研究科教室事掛より
事 務 部	事 務 官	高 山 和 男	〃	配 置 換	社会科学研究所会計掛より
化 学	〃	池 松 瑞 穂	〃	転 任	国立婦人教育会館情報交流課より
生物学科	〃	吉 田 健 彦	〃	〃	国立科学博物館教育部企画課より
事 務 部	〃	菅 原 教 宏	〃	採 用	
情 報	〃	東 方 智 洋	〃	〃	
物 理	〃	青 木 秀 夫	〃	〃	
化 学	〃	渡 邊 涼 子	〃	〃	
生物化学	〃	草 島 葉 子	〃	〃	
生物科学	〃	加 藤 順 子	〃	〃	
事 務 部	〃	川 口 司	7.5.1	転 任	東北大学理学部へ
地 惑	〃	太 幡 恵 美	7.8.6	辞 職	
事 務 部	〃	川 田 耕 二	7.10.1	採 用	
生物科学	〃	加 藤 順 子	7.10.6	辞 職	
〃	技 官	大 河 史 彦	7.10.6	転 任	国文学研究所管理部会計課へ
〃	〃	古 江 亮 司	〃	配 置 換	施設部建築課より
物 理	事 務 官	小 松 陽 一	7.12.1	転 任	東京国立博物館資料部へ
〃	〃	加 藤 喜 子	8.1.1	配 置 換	農学部より
事 務 部	大学院掛総務企画主任	小野塚 朗	〃	昇 任	医学部附属病院総務課附属学校掛長へ
〃	事 務 官	遠 藤 健 三	〃	転 任	総合研究大学院大学学務課より
〃	技 官	長谷川 洋	8.2.13	辞 職	

## 名誉教授との懇談会

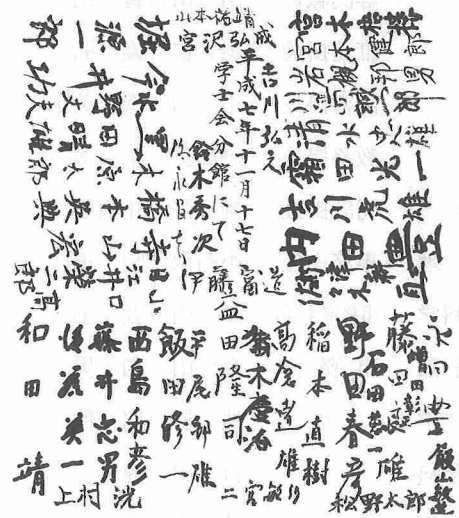
去る11月17日(金)午後5時から、赤門脇の学生会館において、平成7年度の理学部名誉教授懇談会が開かれ、名誉教授の125人のうち42人の方々が出席され、学内からは吉川総長に出席いただき、理学部から益田理学部長をはじめ評議員等関係者が出席した。

懇談会は柚原事務長の開会に始まり、益田学部長から挨拶と近況報告が行われた後、全員で記念撮影を行い、続いて吉川総長の挨拶、最長老の彌永昌吉名誉教授のご発声による乾杯で懇談に入った。

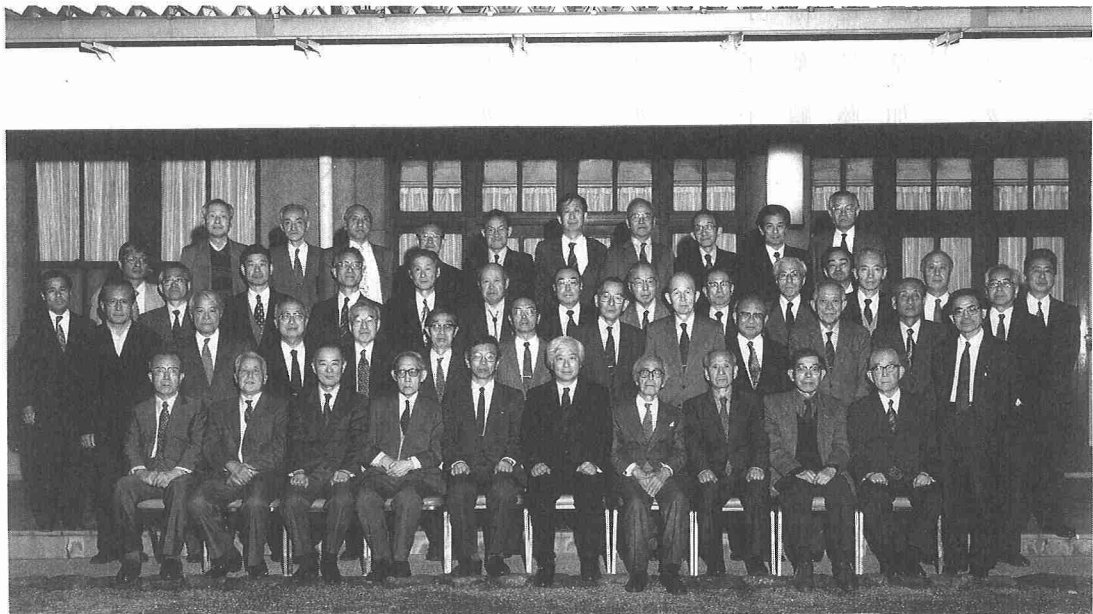
懇談は、各先生方のご活躍の様子や、ユーモラスな思ひ出話し、近況報告などがあり、終始なごやかな雰囲気にも包まれた。

また、情報科学専攻の辻井潤一教授による「言葉と計算機」と題する講演がO.H.P.を使って行われ、名誉教授の先生から活発な質疑応答があった。

最後に益田学部長の挨拶があつて盛会のもとに終了した。



東京大学理学部名誉教授懇談会  
平成7年11月17日 於・学生会館



理学部名誉教授懇談会 平成7年11月17日 於・学生会館

---

編集 : 野本憲一 (天文学専攻) 内線 4 2 5 5  
井本英夫 (化学専攻) 4 3 6 1  
堀内弘之 (鉱物学専攻) 4 5 4 2  
大森博雄 (地理学専攻) 4 5 7 2  
江口 徹 (物理学専攻) 4 2 3 5  
奥拔義弘 (庶務掛) 4 0 0 5

印刷.....三鈴印刷株式会社

---